

名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.156

2006年5月

平成18年度入学式が挙行される



<http://www.nagoya-u.ac.jp/>

目次

●ニュース	
平成18年度入学式が挙行される	2
名古屋大学こすもす保育園開園式を挙行	10
退職者表彰式及び退職職員懇談会が開催される	11
平野総長と杉浦理事が佐久島観測所を視察	11
平成18年度第1回全学教育科目担当教員FDを開催	12
地下鉄駅構内に電子掲示板、東山キャンパスに万博看板を設置	12
●地域にひらく	
環境学研究科が市民開放授業を開講	13
ーUFJセントラルリース寄附講義「環境問題への挑戦」ー	
●知の先端	
動物たちが季節を感知する仕組みを探る	14
吉村 崇（大学院生命農学研究科助教授／高等研究院教員）	
●教育のデザインとプラクティス	
第9回目を終えた「南ドイツ研修」	16
小坂 光一（大学院国際言語文化研究科教授）	
●学生の元気	
平成17年度名古屋大学総長顕彰 受賞者及び団体のことば	18
●職員から	
PT・OT・ST 何だか解りますか	22
佐藤 幸治（医学部附属病院リハビリテーション部理学療法士）	
●部局ニュース	
平成18年度教育学部附属学校入学式を挙行	23
中山恭子氏の講演会を開催	23
NTT 及び NTT 西日本と連携実施協定	24
新日鐵及びデンソーと研究インターンシップ協定を締結	
シンポジウム「災害弱者をどう救うかー外国人への情報提供を考えるー」を開催	25
愛知県教育特区「知の探究コース」初の修了生	25
附属図書館2006年春季特別展を開催「地獄物語の世界ー江戸時代の法と刑罰ー」	26
外国人留学生日本語研修コース開講式を挙行	27
「名古屋大学新入生のためのスタディティップス」を制作	27
ICCAE 2005年第9回オープンセミナーを開催	28
ICCAE 2006年第1回オープンセミナーを開催	28
ICCAE 2006年第2回オープンセミナーを開催	29
博物館が「日韓オカリナ交流」コンサートを開催	29
●新任部局長等の紹介	30
●新名誉教授のことば	32
●資料	34
●本学関係の新聞記事掲載一覧 平成18年3月16日～4月15日	37
●博物館からのお知らせ	
第9回名古屋大学博物館特別展「スポーツと名古屋大学 ーする・みる・つくるー」	41
●イベントカレンダー	42
●ちょっと名大史	
鏡ヶ池ー名大の70年とともにー	44

平成18年度入学式が挙行される



平成18年度 名古屋大学入学式



平成18年度名古屋大学入学式が、4月5日（水）、豊田講堂において、大学院は午前10時から、学部は午前11時15分から挙行されました。

本年度の入学生は、大学院2,338名（博士課程前期課程1,637名、博士課程後期課程619名、大学院法学研究科専門職学位課程〔法科大学院〕82名）及び学部2,224名の計4,562名です。

名古屋大学交響楽団が演奏する「ニュルンベルクのマイスタージンガー」前奏曲（ワグナー作曲）で始まった式典では、平野総長から、大学院入学生及び学部入学生それぞれに対し、辞が述べられました（詳しくは、総長の辞をご覧ください）。また、大学院情報科学研究科博士課程前期課程入学生の野々川 舞さんと教育学部入学生の河合奈津美さんが入学生総代として、入学に当たって、学生としての本分を全うすることを宣誓しました。

続いて、来賓として、名古屋大学全学同窓会副会長の丹羽宇一郎氏（伊藤忠商事株式会社取締役会長）から、先輩として心のこもった祝辞をいただきました（詳しくは、来賓祝辞をご覧ください）。

入学式終了後には、あいにくの雨にも関わらず、豊田講堂前に詰めかけた大勢の学生に、部活やサークルの勧誘を受けたり、保護者などと晴れやかな表情で記念撮影したりする入学生の姿が見られました。

入学式の様子は、シンポジオンホール及び豊田講堂ロビーにおいて、ライブ中継されました。また、経済学部カンファレンスホールでは、保護者を対象にライブ中継され、スクリーンに映し出される映像を熱心に見つめています。また、本学ホームページ上においてもライブ中継され、多くの方々が見守る中、滞りなく終了しました。

なお、入学式の模様は、現在、本学のホームページ（http://www.nagoya-u.ac.jp/broad/event/h18_entrance.html）でも視聴することができます。



総長の辞（平成18年度大学院入学式）

平野 眞一



名古屋大学大学院に入学された皆さん、ご入学おめでとうございます。名古屋大学を代表して、皆さんのご入学を心から祝福し、歓迎します。

名古屋大学大学院は、本日ここに、博士課程前期課程1,637名、法学研究科専門職学位課程（法科大学院）82名、博士課程後期課程に619名、合計2,338名の入学生を迎えました。

皆さんは、本日から、それぞれが大学院生として学位あるいは資格を目指すスタートラインに着いたこととなります。皆さんは、すでに4年あるいは6年以上にわたる学生生活を終えた後の入学であり、大学生活のあり方を理解した上での、更なる向学心による進学であります。

名古屋大学は、皆さんの高い志を大切に教育・研究の環境を提供します。本学は「大学院重点大学」として、教育・研究の環境整備に努めてきましたが、入学生数においても学部入学生数2,224名を上回る大学院入学生を迎えております。

名古屋大学は、前身としての医学校が設立されてからは約130年の歴史がありますが、総合大学としての創立以来約65年の比較的短い歴史の中で、多くの非常に優れた研究成果を産み出し社会に貢献する人材を育ててきました。そのような輝かしい成果を挙げてきたのは、名古屋大学の誇るべき自由闊達な学風のもとに、知の創造の源が優れた教育・研究者群の存在と自由な発想の奨励の重要性にあると深く信じて邁進してきたことにあると考えており、今後ともこれまでの伝統は大切にしていきます。

大学は、優れた教育・研究を行う義務を社会に対して負っております。名古屋大学は、人間性と科学の調和的發展を目指し、人文科学、社会科学、自然科学をともに視野に入れた高度な研究と教育の創造的な活動を通じて、世界屈指の知の創成と将来を担う勇気ある知識人を育成すること

によって社会に貢献していきます。名古屋大学は、優れた人材の育成、学問の発展、創造的な科学技術の創成、安全で高度な医療などにおいて社会に貢献できる我が国有数の大学院重点基幹総合大学であり、皆さんが誇りを持てる大学であります。

知の継承と次世代への文化の発展を支えるためには、異分野間での強い連携と協力関係の強化が必要であります。言うまでも無く、学術・文化は「人」が創造するものであり、「学」はまさに「HUMANITY」そのものであります。「学」の発展のためには、文系・理系の力強い連携が必須であり、総合大学としての名古屋大学はその特長を生かして、「人」を基軸とした活動をします。

「知の拠点」形成と継承・発展のためには、独創的な発想を持つことができる若手の育成が不可欠であります。これから社会のあるべき姿の一つは、年齢・性別などにとらわれず、多様な人材が尊ばれる、責任感を持った若手が目立ってよい環境を整えることであろうと思っています。それが実現されてこそ、国内に留まらず海外に活きた情報が発信でき、真の国際化が実現されるのだと確信します。名古屋大学は、そのような人材育成に努めます。

大学院に入学された皆さんには、総合大学に学ぶ学生として、豊かな人間性を持つ国内外での指導的役割を担うリーダーとしての素養を身につけてもらいたいと思います。

文系、社会系を専攻する方はもう一度理系の基礎を学び、理系を専攻する方は文系、社会系の基礎を身につけて社会の仕組みを学んでいただきたい。人間性と科学の調和的發展を目指し、人文科学、社会科学、自然科学をともに視野に入れた高度な研究と教育を行う名古屋大学大学院に学ぶ皆さん、自分の分野の専門的な学問のみに留まることなく、好奇心を持って他の分野の基礎素養を身につけるように努めてください。

皆さんは、学部生として学生生活を経験した上で、志を持っての進学ですので、「何のために、何を求めて名古屋大学大学院に入学したか」と尋ねる必要はないと思いたい。

「自分が求めるものは何か、最善を尽くすことが出来るものは何か」を早く見出し、その「夢と希望」に向かって果敢にチャレンジしていただきたい。「自分のIDENTITY」を確立してください。大学院は学部の単なる延長ではありません。「自分の頭で考え、答えを出し、行動する」、「目標設計力」と「俯瞰的にものごとをとらえ、解決する力」を身に付けましょう。と同時に、「世界で何が起きているか」に鋭い目を向けてください。あなた方の生活の基盤であり、将来の自分を置く社会なのです。

大学院では特に、世界で誰もやっていない研究を行います。成果が出ず真剣に悩むこともあると思います。その苦悩が厳しければ厳しいほど、課題を解決し、あるいは新しいことを発見した時の喜びは大きいものです。課題を見つけ、情熱を持って果敢にチャレンジしてください。研究は、計画を立てたとしても往々にして予測どおりには進まず、頂上が見えない山に登るようなものです。登ったと思うと、また次のより高い山が現れます。とはいえ、「知」を求める旅は厳しいけれども、また楽しいものです。

私も、修士課程の1年生のころに成果が出ず、自信をなくして、悩みこみました。しかし、自分の姿を失いかげながら、もう一度チャレンジする気持ちを戻して、物事を前向きに考えようと努めました。そうすると、面白いもので、成果も出るようになり、その成果に涙を流して喜んだことが、昨日のように思い起こされます。

今の私の原点はそこにあります。

壁に突き当たり、ときに自分を見失いそうな時には、いつも相田みつをさんの、「肥料」という詩を思い返しております。

「肥料」

あのときの あの苦しみも あのときの あの悲しみも
みんな肥料に なったんだなあ
じぶんが自分に なるための

20世紀は、欧米に追いつき、追い越すために大きな努力が払われてきた時代であり、物質文明を飛躍的に発展させてきました。しかし、一方では、人間とのインターフェイスが弱かったために、人類全体に関わる幾多の問題が残されていることも事実であります。今は、「人」を基軸においた、心の豊かさを大切にしたい安心・安全な持続可能な社会を構築するために、叡智を結集し行動する時期でありま

す。国、大学、産業界は大きな転換期にあります。目的と動機を失わず、勤勉・誠実に新しい時代を創り上げるために努力すれば、活力ある社会に再生することは可能であると確信しております。

皆さんも、新しい社会の創生に向けて、我々とともに真摯に取り組んで下さい。皆さんは、今後の世界をリードすることが期待されている方々なのです。今や、私どもはグローバル化の中でその存在を示さなければなりません。そのために、世界に通じる人間性と基礎学力に加えて自分の考えで議論できる総合力を身に付けていただきたい。

皆さん、キャンパス内では非常に多くの留学生に会って下さい。名古屋大学には、約70ヶ国から1,200人を越える留学生が学んでおり、その数は全国の国立大学でトップクラスであります。キャンパスはまさに素晴らしい国際交流の場であり、小さな地球であります。積極的に留学生と交流し、お互いの言語や文化、歴史を学びあい、理解しあってください。留学生の皆さんは、日本の文化はもとより他の国の文化を学び、交流の輪を広げて下さい。グローバル化においては、人間関係は何にも勝るものであります。国際交流のためのツールでもあるコミュニケーションスキルを在学中に身に付けて、国際的にも活躍する基盤を築いてください。

終わりにもう一度皆さんにお伝えします。今後、受身の姿勢では学問をする情熱や喜びを感じることは出来ません。自ら問題意識を持って積極的に取り組んでこそ、真理を探究、知を創成する楽しみが生まれます。

将来を担う皆さんに期待しています。新しい時代を創り出す「高い志」を持ち続けてください。皆さんの今後の活躍と明るい将来を心から祈念しています。

以上で、大学院入学生への辞とします。



総長の辞（平成18年度学部入学式）

平野 眞一



新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。

名古屋大学は、本日ここに2,224名の学部入学生を迎えました。名古屋大学を代表して、皆さんのご入学を心から祝福し、歓迎いたします。

皆さんは、澁刺とした気分で、高い志を持ち、また胸躍らせてこのときを迎えられたでしょう。ぜひ、この気持ちを大切にしてください。大学も、皆様のこの気持ちを大切にしたい教育・研究の環境を提供します。

名古屋大学は、前身である医学校から始まって約130年、名古屋帝国大学として1939年の開学以来65年ほどの歴史の中で、多くの非常に優れた研究成果を生み出し、社会に貢献する人材を育ててきました。

そのような輝かしい成果を挙げてきたのは、名古屋大学の誇るべき自由闊達な学風のもとに、知の創造の源が優れた教育・研究者群の存在と自由な発想の奨励の重要性にあると深く信じて邁進してきたことにあると考えております。

名古屋大学は「人間性と科学の調和的発展を目指し、人文科学、社会科学、自然科学をととも視野に入れた高度な研究と教育を実践し、将来を担う人材の育成と優れた研究の創造を行い、社会に貢献する」という基本理念のもとに教育・研究の充実に努めます。名古屋大学は、優れた人材の輩出、学問の発展、先導的な科学技術の創出、安全な高度医療などにおいて社会に貢献できる我が国有数の基幹総合大学であり、皆さんが誇りを持てる大学であります。

皆さんが社会で活躍するための専門教育については、「研究重点大学」としての実績ある教育システムを準備しておりますが、同時に21世紀をリードする人材の育成には「教養教育」は欠かせません。名古屋大学では、全学の教員が担当する「教養教育院」を設置し、教養教育を中核とする「全学教育」を行い、“研究と教育の創造的な活動を通じて、世界屈指の知的効果の創成と豊かな人間性を持つ知識人”の育成に努めております。

既成概念にとらわれず、科学的・歴史的な知的財産を踏まえて、新たな分野、課題に果敢に挑戦すること、また自らの社会的責任と役割を自覚して社会的弱者への思いやりを持ち、国内および国際社会における正義の実現に向けて行動する人間性を持った勇気ある知識人を育てようとしております。

「学」はまさに「HUMANITY」そのものであります。「学」の発展のためには、人文科学、社会科学、自然科学の強い連携のもとに、名古屋大学では総合大学としての特長を生かし、人間性と科学の調和的発展を視野に入れた高度な教育と研究を行います。

「知の拠点」形成と継承・発展のためには、独創的な発想を持つことができる若手の育成が不可欠であります。これからは、年齢・性別などにとらわれず、多様な人材が尊ばれる、若手が目立ってよい環境を整えることが必要であると思っています。それが実現されてこそ、国内に留まらず海外に活きた情報が発信でき、真の国際化が実現されるのだと確信しております。

一方、我が国が抱える構造的な財政赤字の問題と相俟って、急速な少子化及び高齢化社会の到来など社会基盤の根幹に関わる問題、生活基盤の二極化問題、そして無惨な事件に見られる不条理な問題など、ことさら終末感を思わせるような問題があります。これらの現実に触れるたび、かつてないほどの不確実性や閉塞感に戸惑いを感じている人は多いと思います。このような社会環境下で育った皆さんは、程度の差はあれ、多くは内面に存在感についての疑念を抱えながら大学に入学してこられたかもしれません。

皆さん、ここで、「生を受けて学ぶことが出来る今ある自分の環境に感謝」とするとともに、今一度胸に手をあてて自問してみてください。「何を求めて、何をたくて名古屋大学に入ってきたか」と。「自分が最善をつくすものは何か」を早く見出し、その夢を実現するよう努力していただきたい。最近、「自分探し」と称して、本当の自分が他にある

かのように思って、置かれている場から逃げようとする若者が多いと心配しております。皆さんの中に、入学できた学部、学科が希望に沿わなかった方がいるでしょう。ここで声を掛けたいことがあります。人の人生に、生まれながら与えられた道はありませんし、決められた道はありません。自分の前にある道は一本ではありません。道は、その環境の中で、自分で切り開いていくものです。何時までもくよくよして、自分探しと称して逃避しないでほしい。自己を確立すること、置かれている場で最大限の努力をすることが先決であります。甘えて逃避しないで欲しい。

「人生の实りは、日頃から貴方がどんな種子を蒔いたか」が重要です。「人生の種子」とは「考え方」あるいは「心構え」といってよいかも知れません。自分の人生という畑に責任をもって、種子を蒔きましょう。

私は機会あるたびに「夢を持とう。夢の実現に向かって進もう」と呼びかけています。本年の学生が主体となって運営する「名大祭」のテーマは、「夢源」であります。自分の夢を形にして、社会の中で表現できる可能性が満ち溢れている、との思いが感じられます。限りなく夢の実現に向けてチャレンジしてもらいたい、と希望しております。当然ですが、大学への入学は目標ではありません。「夢と希望」を叶える過程の一里塚です。どういう過程を経て最終目標に到達するのか、その道筋を立てましょう。「夢と希望」は人生を活力に満ちたものにします。

大学では、何かを漫然と待つのではなく、自分から求めて積極的に行動してもらいたい。受身の姿勢では学問をする情熱や喜びを感じることは出来ません。自ら問題意識をもって積極的に勉強し、行動してこそ、知の探求、真理を探究する楽しみが生まれます。講義では、これまでに人間が人文と社会と自然の諸現象を観察し、理論化し、体系づけてきた学問体系の形成過程を教え、専門的な知識に裏付けられた批判的な思考力と構成力を養うようにしていきます。いまだ分かっていないことがどれだけ多くあるかを知ることになるでしょう。これは皆さんの好奇心を刺激し、学習意欲を掻き立てることになるでしょう。

と同時に、現在、世界で、日本で何が起きているかに、鋭い目を向けてください。我が国の将来を担うのは皆さんです。希望の持てる社会にしなければなりませんし、国際的にも責任ある国にしなければなりません。

名古屋大学には、約70ヶ国から1,200人以上の留学生が学んでおり、その数は国立大学ではトップクラスであります。キャンパス内では、接する留学生から、その国の言語はもとより、歴史、文化や宗教などを学べるチャンスが一杯です。キャンパスは、まさに素晴らしい国際交流の場です。

グローバル社会においては、人間関係はどんなものより大切であります。留学生には、名古屋大学に留学して満足してもらえる環境を整えたいし、日本人学生には国際的に活躍できる基礎を築いてもらいたい、と思います。在学中に、異なる国の方々と議論できるコミュニケーション力を身に付けてください。

皆さんは、今後、このような教育・研究環境のなかで学んでいくこととなりますが、新しい時代を創り出す「高い志」を持ち続けて積極的に学んでください。学生生活のもう一つの重要な活動は、多くの教員と交流し、人生の機微を学ぶとともに、互いに心から信頼しあえる真の友人を作ることです。

また、大学は、ただ単に知識の吸収の場であるばかりでなく、全人教育の場でもあります。全人教育にあっては、課外活動である部活動が果たす役割は大きいものです。最近では、ややもすると人間関係が希薄であるといわれていますが、部活動では、同僚間、又卒業生の会等を介して広い世代の人間との交わりがあり、今後の人生において大切な財産になります。名古屋大学は、運動関係の部活動が活発な文武両道に通じる人間教育を目指している大学のひとつであり、新聞でも取り上げられているように競技大会でも活躍しております。

「学習」する意欲を失わず、同時に部活動などを通じて実りある大学生を送り、総合大学の学生として良い人間関係を築き、心身を磨き、学問的にも人間的にも大きく成長されることを期待しています。

貴方たちはダイヤの原石のように潜在力があります。自分を磨けばより輝き光り、人をひきつけます。大学はその環境を用意しますが、自分でも研鑽して欲しいと、希望します。

皆さんの今後の活躍と明るい将来を心から祈念しています。

以上をもって、入学生への辞といたします。



来賓祝辞

丹羽 宇一郎 名古屋大学全学同窓会副会長
伊藤忠商事株式会社取締役会長



平成18年度大学院入学式

名古屋大学大学院ご入学おめでとうございます。約10万人の名古屋大学並びに大学院の卒業生を代表いたしまして、一言お祝いの言葉を申し上げたいと思います。

皆さんは今、学問と真理探求への準備の4年間、あるいは6年間が終わり、いよいよ広い意味での学者としての時間を持つことになったわけであります。たとえ生涯の仕事としない場合でも、大学院で学び、あるいは学ぼうとするということは、学問的な真理に対する尊敬と思慕の念をいつまでも忘れないということであることを肝に銘じてスタートしていただきたいと思います。

すでに幾多の賢人が申しておりますが、大学には重要な目的が2つある。1つは人文、自然の学問、教育を通じて、人類が開拓、蓄積してきた現在の知識を享受し、伝達することで、これは皆さんが今までもやってこられました。2つ目は、さらに人類の福祉と文化の発展のために、各々の分野において新しい知識、真理を探究することであり、この2つは今も大学の重要な目的であります。

さて、専門教育とは、我々実業界が求める職業的な知識ではなくて、その基礎となり、活用する原理を理解し把握することを意味しており、この基礎原理の上にさらに新しい真理の発見と創造に向かう、つまり真理のための真理の研究こそがギリシャ以来の学問の精神だといえるわけがあります。しかしながら知識そのものの目的と価値には、知識そのものは盲目であります。つまり科学は悪い目的にも良い目的にも使用されるだけであります。人間の社会では、正義と欲望、夢と恐怖、神と悪魔、正と邪がお互いに影響しあい、交錯をしているものです。それを決するのは、専門知識ではなくて、それ以上に人間の知恵だと思えます。それは揺るぎない価値観とか、善悪の判断力とか、あるいは人間としての良識という言葉に置き換えることも可能かと思えます。処世のための功利的な目的に陥ることなく、本来の大学の目的を心していただきたい。現在の知識の記憶反復ということではなくて、皆さんの理性が刺激を受けて触発され、さらに新たな発見と構想に向かって研究さ

れることを期待したいと思います。学習、研究、そして創造、これが学問の本当の目的であり真髄であります。皆さん各々が、真理と学問の前で謙虚であれ、人格と知性を磨かれることを期待いたしまして、お祝いの言葉といたしたいと思えます。おめでとうございます。

平成18年度学部入学式

皆さん、名古屋大学、ご入学おめでとうございます。約10万人の名古屋大学卒業生を代表いたしまして、お祝いの言葉を述べたいと思います。

もう何年も前から大学の大衆化が進んでおります。いつの間にか大学もエリートの府という言葉がなくなりました。「エリート」という言葉は、ナチズムとかファシズムという弊害が出たこともあり、その言葉自身が悪、あるいは忌避されてきた歴史があります。また、官僚主義とも結びついて捉えられ、国民の中でも平等社会を求める声が強くなったおかげで、皆さん方も「エリート」と呼ばれることを嫌う風潮が出ております。

しかしながら、エリートのない国は衰退する、選ばれたリーダーのない国は崩壊するということは歴史的な事実であります。そういうことから言いますと、やはり古いエリート意識ではなくて、「新しいエリート」が国としても、あるいは人間の集団としても必要であります。「新しいエリート」というのは、国と国民に対して noblesse oblige という大変厳しい責任を持ったものでなければなりません。厳しい試験を通して名古屋大学に入学された皆さん方は、「私は新しいエリートの卵である」という意識、自覚を持っていただきたいと思えます。

大学は高校時代とは異なり、広い範囲で自由を享受できます。しかしながら、皆さんが自らの理性に基づいて、自らの生活を規律して責任を持って行動するということが当然、必要になります。自由とは自分の好き放題にやっついということではありません。自由には必ず責任が伴います。そういう意味では、自由を謳歌して、責任を持って行動する必要があります。

大学は知と精神の修養の場であります。戦後、幾多の賢人あるいは大学の総長の皆さんが、いろいろな場所で発言されております。そのほとんどは学習をせよ、創造をせよ、各々の人格と知性を磨け、あるいは自由にして高貴な人間たれというようなことを訴えてこられました。学問的な使命だけでなく道徳的使命においても、国民の期待は高いということでもあります。しかしながら、あまりにも大衆化した現在の大学においては、学問の府としての意識は薄れつつあります。巷間では、一部の大学生は国民が目を背けたくなるような事件を起こしております。もちろんこれは日本だけのことではありません。1週間ほど前、米国ノースキャロライナのデューク大学においても、大学生が同じような事件を引き起こしております。これは米国においても、大学の大衆化、エリート意識の欠如、国民の期待を感じない自由奔放な生活、無責任な行動というものつつながっているということです。

学生諸君が機械的に講義を受けて、就職のためにいい成績と職業的な技術の習得を目的とするという非常に卑俗な生活に身を任せるといふようなことは、論外の話であると思います。皆さんは新しいエリートの卵として、真理の前に謙虚で、人間力と知識の修養に努めていただきたいと思っております。実業界が諸君に望むのは、就職のためのよい成績ではありません。国民のお手本となるような、財とか権力におもねない、人間として卑しくない、高潔な品位と良識豊かな人間であります。

かなり高尚な話をしてきましたが、少し最近の状況につきまして、私の感じていることを述べておきたいと思っております。これは皆さんには是非、実行してほしいという意味で申し上げたいと思っております。最近のある調査によりますと、皆さん方の年齢の男女は、一体1日に何分新聞を読むかという、平均しますと女性が2分、男性が8分です。これでは世界に目を向けたとはいえません。世界で何が起きているか、日本で何が起きているか、ほとんど興味がないということでもありますし、情報も入っていないかと思っております。先般もある海外の経営者の方が来られた際に「年に1度、欧州で世界学生会議を開催し500人程度集まっているが、日本からの参加者は1、2名に過ぎないのはなぜだろうか。語学の問題か、あるいはディベートができないのか、知識がないのか、自分の身辺のこと以外興味がないのか」といふような疑問が出されました。私も最近では学生諸君がそういう会に出るか出ないかということについて、ほとんど知識ありませんでしたが、大変驚きました。それは少なくとも、先ほど申し上げた新聞を読まない、世界がどのように動いているのかに全く興味がない、身辺のこと以外にほとんど興味を持たない表れであろうかと思っております。

さらに読書の時間が大変に減っているという結果も出ております。大学生で、ひと月に1冊の本も読まない方は、100人中20人ぐらいおります。学校の教科書は当然読むとして、漫画、週刊誌、スポーツ新聞は読むかもしれないが、



一般の書物についてはほとんど読まない。こういう学生が増えているということでもあります。従って、私が申し上げたいのは、皆さんは1日に30分、読書を下さいということです。この蓄積が皆さんの将来に非常に大きな影響を与えるだろうと思います。今日から1日30分、読書ができる人は、多分本当のエリートになるでしょう。しかし、おそらくできないと思います。つまり1日2日はできても、これを4年間継続してできるかは難しいと思います。もし4年間継続してできるのであれば、そのあとも30分ではなくて1時間、あるいはそれ以上の読書が続けるということになり、読書の喜びを知ることになると思います。

なぜ読書をするか。それは人間の知恵を磨くということもあるでしょうけれども、我々実業界からの立場からいいますと、あらゆる仕事に対する構想力をつけること、あるいは物事を論理的に考える習慣をつけることになります。これは、我々経営者の立場からいっても大変に重要な能力であります。少なくともエリートの卵として皆さん方はそれだけの努力をしていただきたい。人よりも努力をしなくして、人よりも優れ、あるいは人の上に立つということではできません。ここにおられる方は能力的にほとんど同じだと思います。問題は努力する力があるかどうか。差はそれだけです。従いまして皆さんは、ナンバーワンの努力をすればナンバーワンになる。オンリーワンである必要はありません。努力がナンバーワンであれば、必ず人格的にも、あるいは論理的な思考においてもナンバーワンになると思います。そういう意味で24時間のうちの30分、読書に時間を割くことをお奨めしたいと思います。それがまた国民の新しいエリートの卵としての皆さん方への期待であります。

もし皆さんが宝石の原石として名古屋大学に入学されたとするならば、磨かなければ原石のまま、がらくた石と同じであります。そこをよく肝に銘じて、これからの4年間、自由な時間を、世界に目を向けて思い切って謳歌していただきたい。皆さんは1日3食、体に栄養を与えているはずですが、心は何回、栄養を与えているでしょう。心にはほとんど栄養を与えていない。それはまさに犬猫と同じであります。人間の証というのは心に栄養を与えることです。その言葉をお祝いの代わりにお贈りして、話を終わりたいと思います。おめでとうございます。

名古屋大学こすもす保育園開園式を挙

本学の構成員が利用するための学内保育所「名古屋大学こすもす保育園」が4月1日（土）に開設され、4月3日（月）、同保育園前において関係の来賓を招き、開園式が挙行されました。

開園式では、関係教職員が見守る中、平野総長のあいさつの後、森田美弥子前学内保育所設立準備作業委員会委員長・教育発達科学研究科教授から保育園の概要が説明され、総長、来賓、理事、男女共同参画関係教員によりテープカットが執り行われました。また、開園式終了後、参列者による真新しい保育園の施設見学も併せて行われました。

本学では、全国の大学に先駆けて、平成12年度に「名古屋大学における男女共同参画を推進するための提言」を発表以来、さまざまな男女共同参画への取り組みを行ってきました。その中の大きなテーマの一つである、仕事と育児との両立支援に関しては、平成13年度、平成15年度の2度にわたる構成員の調査の結果から、学内保育所へのニーズが非常に高いことが明らかになりました。これに応えるため、男女共同参画推進専門委員会、男女共同参画室を中心に、学内保育所の設置に関する検討を進めた結果、昨年1月に役員会、部局長会及び教育研究評議会において設置が決定されました。その後、学内保育所設立準備作業委員会が1年をかけて準備し、「名古屋大学こすもす保育園」が開設されることになりました。

保育園の名称は、全学に公募して決定されました。学内の関心も高く、多数の応募がありましたが、検討の結果、周藤芳幸文学研究科教授から提案された、「こすもす保育園」に決定されました。

「こすもす」は、親しみやすい名前であると同時に、ギリシア語で「世界」、「宇宙」を意味し、ここで成長する子ども達が、名大というマイクロコスモスから世界というマクロコスモスへと羽ばたくことができるように、また、個人というマイクロコスモスと社会というマクロコスモスの間でバランスのとれた人格を形成することができるように、との思いが込められています。

保育園の特色としては、教職員の福利厚生はもとより、国際交流推進、学生サービスの向上を包含した本学の「男女共同参画推進事業」として位置づけられ、年度途中の入園、一時保育、早朝から夜までの保育、土曜保育、病後児保育など、大学という職場環境を考慮した柔軟な保育形態があげられます。

開園後は、名古屋大学こすもす保育園運営協議会を中心に、保護者の方々、保育士の皆さんと協力して運営が進められることになっています。本学で学び働く教職員、学生、留学生を支援するとともに、次世代の子ども達の成長を支



開園のあいさつをする平野総長



テープカットする関係者

援するという、2つの役目を担い、21世紀の男女共同参画社会にふさわしい、また、研究、教育の拠点である本学の魅力となるような保育園となることが望まれます。

なお、保育園の概要は、次のとおりです。

名 称	名古屋大学こすもす保育園
対 象 者	構成員が養育する就学前までの乳幼児
定 員	30名（常時保育26名程度 一時保育4名程度）
利 用 日	月曜日から土曜日まで （祝日、年末年始、大学が定める休日を除く）
保 育 時 間	7:30から21:00まで （基本保育時間・基本外保育時間の設定）
施 設	木造 1階建て 建物面積267㎡
運 営	運営協議会を中心に運営され、保育を保育業者に委託

（詳細は、名古屋大学男女共同参画室ホームページ <http://www.kyodo-sankaku.provost.nagoya-u.ac.jp/> に掲載されています。）

退職者表彰式及び退職職員懇談会が開催される



記念撮影

本学退職者表彰式が、3月28日（火）、豊田講堂第1会議室において挙行されました。

これは、平成18年3月31日付けで退職される勤続30年以上の職員を表彰するもので、表彰式には、被表彰者42名のうち33名が出席し、平野総長から被表彰者一人一人に表彰状と記念品が手渡されました。続いて、平野総長から祝辞があり、永年にわたる本学への尽力に対する感謝のことが述べられました。

引き続き、ユニバーサルクラブにおいて、名古屋大学退職職員懇談会が開催され、上記被表彰者のほか、3月31日付けで定年により退職される職員をはじめ、関係者が出席しました。山下理事のあいさつの後、退職者を代表して鈴木工学部・工学研究科事務部長から謝辞が述べられました。退職者は、出席者と今日までの思い出などを語り、別れを惜しんでいました。

平野総長と杉浦理事が佐久島観測所を視察

平野総長と杉浦理事が、大型連休の合間の、5月2日（火）に太陽地球環境研究所附属ジオスペース研究センター佐久島観測所を視察しました。今回の視察は、同研究所の現状を把握する一環として、計画されたものです。

観測所の位置は、愛知県の三河湾に浮かぶ佐久島のほぼ中央部分にあり、同研究所の中でも最も古い観測施設です。名古屋市から車で約1時間30分程度で一色港に着き、そこからは船で約30分で、佐久島東港に着き、さらにその港から徒歩で15分程度のところに観測所があります。

観測所の施設は、3階建ての建物とその観測施設に連なる鉄塔、反射板等が設置されており、同研究所の改組以前（平成2年）の空電研究所当時から、大気変動における基礎的な諸現象の観測を約20年以上行ってきました。

総長の一行は、まず観測所の建物に入り、1階から3階まで各部屋をくまなく視察し、その後、佐久島の中腹にある無線データを発信するための鉄塔まで、道なき道を、歩いて行き、藤井研究所長からの詳細な説明を受けるとともに、佐久島観測所の現状を視察しました。

視察後、総長、杉浦理事からは、藤井研究所長に対して、



視察の様子

今後この土地や施設をどのように活用するか、具体的な提案を行ってほしいとの意見が出されました。

なお、当日は、総長、杉浦理事の他、須崎茂弘施設管理部施設企画課長、太陽地球環境研究所からは、藤井研究所長のほか、鳥山哲司技術長、向井 廣専門職員、社本好由事務長が同行しました。



平成18年度第1回全学教育科目担当教員FDを開催

教養教育院は、4月3日（月）午後、経済学部カンファレンスホールにおいて、平成18年度の第1回全学教育科目担当教員FDを開催しました。これまでは、開催場所の狭さが問題でしたが、今回は改装された同ホールが利用されたことにより、前回は上回る311名の教員が参加しました。

始めに、若尾教養教育院長から今回のテーマである「学生の自発的な学習をどう促進するか」の趣旨説明があり、



全学FD参加者の様子

平野総長のあいさつの後、二つの話題が提供されました。

一つ目は、正嶋宏祐名誉教授による「よく考える学生を育成するために」と題するもので、まず学生にとって教員の教えることを盲目的に信ぜず、自分が納得することが重要、と述べられました。そして、米国の大学の例をあげ、受講科目を制限し、学生に十分に自習させ、かつ考える時間を与えることの意義を強調しました。さらに、教育の根本は若者への愛情で、卒業生が感謝してくれる教育の提供が大切、と話されました。

次に、鳥居朋子高等教育研究センター講師が、ミシガン大学の事例から「学生の自主的な学習を促すカリキュラムおよび学習支援システム」の説明がありました。そして、本学でも総合大学の特性を活かし、必修科目と選択科目を組み合わせた柔軟な構造のカリキュラム及び学生が学習を成功裏にデザインするためにアカデミック・アドバイザー機能の提供が望ましいと示唆しました。

全体会の後、科目別FDが開かれ、グッドプラクティスの報告などがありました。

* FDとは、ファカルティ・ディベロプメントの略で、日本の大学では教育改善のための組織的取り組みを指す言葉として用いられています。

地下鉄駅構内に電子掲示板、東山キャンパスに万博看板を設置

地下鉄名古屋大学駅改札口横に電子掲示板が設置され、入学式が行われた4月5日（水）から本格的に稼働を始めました。また、愛・地球博（愛知万博）で使用していた看板類を博覧会協会から無償で譲り受けたものをリユースし、学内の数カ所に設置しました。

本学東山キャンパス内では、常に多数のイベント、学会等が開催され、また、博物館、附属図書館等を一般の方に開放しているため、学外から大勢の方が来訪しますが、敷地が広く、建物も多いため、目的地に辿り着くことに苦労されることが多々ありました。そこで来学される方の多くが地下鉄名城線を利用されることに着目し、名古屋大学駅の改札口横に電子掲示板を設置し、画面にイベント会場への最寄り出口、キャンパス地図を掲示すると同時に、地下鉄駅出入口等に万博看板を設置することにより、目的地案内及び本学での活動状況の周知という二重の効果を上げることが期待しています。



電子掲示板を視察する平野総長

環境学研究科が市民開放授業を開講

— UFJ セントラルリース寄附講義「環境問題への挑戦」 —

涌田 幸宏 大学院環境学研究科助教授

大学院環境学研究科が、4月よりUFJセントラルリース寄附講義「環境問題への挑戦」を開講しました。「人間社会と自然とのバランスをいかに再構築するか」が全体テーマで、環境問題に第一線で取り組んでいる専門家を講師として招いています。具体的な講義テーマも、エネルギー文明、世界的な人口増加、都市と農村のつながり、自然観や倫理観の変遷などの興味深い問題を取り上げていきます。また、より理解を深めるために、教室での講義だけでなく、実際に現地を訪れる視察旅行も企画されています。

同研究科では、UFJ環境財団による寄附講義を、本学初めての試みである「市民開放授業」として実施してきましたが、本寄附講義もこの理念を引き継ぎ、一般市民に授業を開放しています。市民の定員を40名と設定していましたが、応募が殺到して、あっという間に定員が埋まってしまいました。

4月11日に、第1回目の授業があり、市民の

かたに簡単なアンケートに答えていただきました。受講動機としては、「地域で環境ボランティアをやっているが、勉強する機会が少ないので、この講義で専門的な知識を身につけたい」、「これまでは、企業人として環境問題には特に関心を持っていなかったが、企業を離れて数多くの切迫した環境問題の存在を知り、これを機会に勉強したい」、「環境問題の解決に向けて、自分自身がどのように行動したらいいのか、少しでも指針を得て具体化していきたい」など、様々な回答がありましたが、どれも高い学習意欲と講義への期待を大いに感じさせるものでした。

本講義には、本学学部生のほか、環境学研究科大学院学生や単位互換を利用した他大学の学生も数多く出席していますが、学生と市民とが切磋琢磨して環境問題を学習する場になってくれればと期待しています。本講義が、名古屋大学の地域社会貢献に少しでも役に立てばと思っています。



動物たちが季節を感知する仕組みを探る

吉村 崇 大学院生命農学研究科助教授／高等研究院教員

毎年春になると花が咲き乱れ、生命の躍動を感じます。動物たちの世界においても、鶯のさえずり、ツバメの飛来などに代表されるように、さえずり、渡り、繁殖などの営みが毎年正確に繰り返されています。これらの動物の行動については紀元前300年代の哲学者アリストテレスの著書「動物誌」(Historia Animalium)にも詳しく記述されていますが、アリストテレス以来、2,000年以上経った現在も、生き物がいかに季節を感知し、四季の変化に適応しているかは明らかにされていません。私たちはこの長年の謎に取り組んでいます。

今日先進国では一年を通して様々な食材を入手することが可能であり、季節の影響は小さくなっていますが、自然界では季節によって手に入る食料が異なります。したがって動物たちが子孫を残していくためには、食料が多く、条件の良い時期を選ぶことが不可欠です。しかし多くの食料を手にしてから繁殖活動を開始するようでは手遅れなのです。なぜなら鳥類や小さな哺乳動物は、なわばりを張り、異性をひきつけ、交尾行動を行い産卵あるいは出産するという一連の作業を完結するのに数ヶ月要するため、子孫が生まれるころには食料が少なくなっているからです。一方、妊娠期間が約半年のヤギやヒツジたちは秋に交尾行動を行い、春に出産を行います。いずれの場合においても食料が豊富で温暖な春に子孫が生まれるように季節を予知して行動するように遺伝的にプログラムされているのです。

私たちを取り巻く環境は日々変化していますが、多くの生物は日の長さ(光周期)をカレンダーとして利用しています。気温や降水量も季節によって変動しますが、年によって暖冬、冷夏、空梅雨など、ばらつきがあり、信頼性が高い情報とはいえません。それに比べ、春分、夏至、秋分、冬至は毎年決まった時期に訪れるように、光周期は極めて精度の高い情報を提供しており、生物が日長をカレンダーとして利用しているのは理に適っています。このように光周期の変化に応じて生物の生理機能が変化する性質は光周性(photoperiodism)と呼ばれています。

生命の神秘を解き明かそうとすると、地球上の多種多様な生物の中から、最適なモデルを選ぶ



図1. ウズラ (Japanese quail, *Coturnix japonica*) キジ科の渡り鳥。室町時代から鳴き声を楽しむために飼いならされていた。ニワトリとは近縁種なため、ニワトリ、ウズラ間でF1やキメラが作成可能であり、ニワトリのゲノム情報がほぼそのまま研究に利用できる。

ことが重要です。例えば、ショウジョウバエやマウスなどのモデル生物は生物学の発展に多大な貢献をしてきましたが、季節の変化には全く反応できないため、私たちの研究には適当ではありません。一方、鳥類は空を飛ぶために可能な限り身体を軽くしており、生殖器も必要な時期だけ発達させるのです。特に雄では日長が長くなると精巣重量が2週間で100倍以上も大きくなります。日長の変化に対してこれほど急速かつ劇的に反応する生物は他には知られておらず、鳥類、とりわけウズラは光周性研究の最適なモデル生物といえます。我が農学部では鳥類の研究が伝統的に盛んなので、私たちはこの地の利を生かして、ウズラが日長の変化に反応して繁殖を開始する際に鍵とな



図2. ウズラの卵 ウズラは日本では主に卵が食されるが、ヨーロッパでは食肉としても利用されている。ウズラの卵の約7割は愛知県内で生産されている。ニワトリにおいても名古屋コーチンがよく知られているように、東海地方は養鶏産業が盛んであり、名古屋大学は家禽の研究が古くから盛んである。

る仕組みを解明することに成功しました。また、さらにその仕組みがハムスターやヤギなどの哺乳類にも共通していることも明らかにしています。

私たちは普段何気なく卵を食べていますが、本来ニワトリやウズラは秋から冬は卵を産まないため、人工照明によって卵の生産率をあげています。近い将来食糧危機が訪れるといわれています。繁殖活動の制御は食糧生産に直結していることから、動物たちが季節を読み取る仕組みの全容を解明できれば、地球上の様々な地域で季節に関係なく、私たちの食料となる家畜、家禽を増産できると期待されます。本研究を通して生物学の発展と食料生産の向上に貢献したいと考えています。



図3. ウズラの精巣 ウズラの精巣は日長が長くなると劇的に発達する。成人男性の体重に換算すると、約1kgにも達し、脳よりも大きくなるのである。日長の変化にこれほど劇的に反応する動物は他には知られておらず、ウズラは光周性研究に最適な動物である。

1996年名古屋大学大学院農学研究科博士課程後期課程中退、同年名古屋大学農学部助手、2004年名古屋大学高等研究院教員、2005年大学院生命農学研究科助教授。2004年日本時間生物学会奨励賞受賞、2005年財団法人農学会日本農学進歩賞受賞。

モットー：歴史に耐えうる仕事を地道に積み重ねる。

ひとこと：一人の科学者が研究人生の間にできることは限られているが、人を育てれば指数関数的に科学の発展に貢献できる。自分の研究とともに人材育成に尽力したい。

趣味：子どもと向き合うこと。

(学生時代は色々あったが、現在は時間がない。)

よしむら たかし



第9回目を終えた「南ドイツ研修」

小坂 光一 大学院国際言語文化研究科教授

学生が現地で実際にドイツ語を使い、ドイツ文化を直接体験することを目的として1989年から隔年で行ってきた「南ドイツ研修」は2005年夏に第9回目を終えました。参加者は毎回主として学部学生（学部、学科を問わず）で、引率者は2005年3月まで同僚だったK.v. ホイドゥック氏と私でした。

期間は夏休み中の1ヶ月間であり、南ドイツの田舎町にある州立研修所で合宿を行う前半と、各人が自由研修を行う後半に分かれます。

前半の合宿の間はドイツ人講師のもとでのドイツ語授業とドイツ文化を知るための視察や観光を行います。1日3食「同じ釜の飯」ならぬ「同じかごのパン」を食べながらの合宿は実に和気あいあいとした雰囲気の中で行われ、教師と学生の理想的な関係が築かれます。まるで夢を見ているような「ゆったりとした時間」が「あわただしく」過ぎていきます。

後半の2週間は各自が自由に各地に散らばります。教師としてはいささか不安も感じますが、そ



2005年夏の教員スタッフ（左から2番目が筆者。こんな幸せそうな顔はめったに見られない）

こは心を鬼にして送り出します。電話番号を渡し、「困ったら電話しろよ!」とくどいくらい言っても、電話がかかってくることはほとんどありません。学生たちは、ドイツ語が不自由ながらも、みごとに自力で困難を乗り越えます。彼（女）たちの行動力と知力には教師である私も兜を脱ぎます。そして、帰国前日の再集合は感動的で、体験談やほら話をしあっているのを聞きながら、「教師冥利に尽きる」という表現を実感します。私にとって彼（女）たちの多くは、在学期間中のみ存在する「通過集団」ではなく、卒業後も関係が続く「生涯の学生」となります。参加して後悔した学生は絶対いないはずで

この研修には次のような効果があります。

- ①実施前及び実施後におけるドイツ語学習意欲が上昇する。
- ②参加者の満足度はきわめて高く、人生観も変わる。この研修に2度参加した者も数名いる。
- ③後に短期・長期にわたり渡独するきっかけとなる。中にはドイツで就職した者も複数いる。

参加予定の学生たちは実施前から熱心にドイツ語に取り組みます。問題はその学生が何らかの事情で研修に参加できなくなったときです。あるとき、ふだんは授業中に目を輝かせてドイツ語を練習していた学生が居眠りをするようになりました。気にはなっていたのですが、そのときは事情がわかりませんでしたし、授業中のできばえも試験の結果も別に悪くなった訳ではありませんでした。しかし、後に参加予定者を集めて説明会を行ったとき、その学生は来ませんでした。そこで初めて、参加できなくなったことを知りました。目標を失うということは恐ろしいことです。



2005年夏の参加者（ノイシュヴァンシュタイン城をバックに）

これまでに行った研修の期間及び参加者数は以下の通りです。

- 第1回目：1989年夏（7月8日－8月7日）参加者26名
- 第2回目：1991年夏（7月12日－8月12日）参加者33名
- 第3回目：1993年夏（7月8日－8月9日）参加者30名
- 第4回目：1995年夏（7月22日－8月21日）参加者24名
- 第5回目：1997年夏（7月19日－8月18日）参加者16名
- 第6回目：1999年夏（7月24日－8月25日）参加者19名
- 第7回目：2001年夏（8月3日－9月4日）参加者20名
- 第8回目：2003年夏（8月1日－8月29日）参加者14名
- 第9回目：2005年夏（8月6日－9月2日）参加者15名

初期の頃は参加希望者が多く、特に第2回目は抽選やテストを行って参加者を制限しました。最近では参加者確保に苦慮しています。参加希望者が減った理由としては次のようなことが考えられます。

①ドイツ語の学習人口が減った。

②通貨がユーロに変わったことにもない、ヨーロッパ各地ではなほだしい便乗値上げが行われた。また名大の夏休み開始が8月になり、出発日が航空運賃の一番高い時期と重なるようになった。この2つが原因して、参加費用が大幅に増えた。

③授業クラスの少人数化により、授業は理想に近づいたが、「人集め効果」という観点から言えばマイナスになった。

私は、研究、教育、趣味の3つが一体化している果報者であり、今、第10回目を夢見ていますが、一定数の参加者を確保できる見通しがなく、定年まで3年しかないことなどを考えると、「まぼろし」に終わる可能性が大です。その「まぼろし」のために、今からあれこれ準備している自分がいささか滑稽でもあります。

1971年3月名古屋大学大学院文学研究科修士課程修了。その後、富山大学講師、九州大学助教授を経て、1980年4月から名古屋大学勤務。文学博士。

趣味：言語学習、言語教育、写真機（クラカメ）、音楽（あらゆるジャンル、特に日本民謡）、機械・機器いじり、鉄道

モットー：学生の成績評価の際は教育効果を考えるべきである。言語教育や言語学習は「容器に入っている中味」の分析ではなく、「中味を入れる容器」の構築。「中味を持ち運ぶ」ということは「容器を持ち運ぶ」ことに他ならない。その「容器」とはすなわち「言語」。大切なのは「中味」より「外見」。

こさか こういち



平成17年度名古屋大学総長顕彰 受賞者及び団体のことば

「学修への取り組み」部門

言語の研究、代名詞の研究

増本 理絵 文学部人文学科4年

今回、総長顕彰という身に余る賞をいただき、大変光栄に思います。

卒業論文では、奈良時代語の代名詞について研究しました。奈良時代語の代名詞は、現代日本語のそれと比較すると、シ



研究室での勉強風景

ンプルで系統づけられているように見えます。しかし、整理されているように見えても、未だ定説では解決できない問題が残っていることも確かです。また、それぞれの代名詞の特徴について説明はされていても、その理由（なぜその代名詞はそのような特徴を持っているのか？）についてはほとんど解明されていませんでした。そこで卒業論文では、「指示代名詞」と「人称代名詞」という区分ではない新しい分類を用いることで、奈良時代語の代名詞をもう一度整理し直そうと試みました。まだまだ修正の余地はありますが、残されていた問題を解決することができるのではないかと考えています。

「言語の研究」は、「その言語を使っている人々が、どのように物事を考えているかを研究する」ことに繋がります。代名詞は、単純に言えば、話し手と世界との関係を表す言葉です。したがって、代名詞の研究は、「その言語を用いる人々は、世界と自分との関係をどのように捉えているのか」を探ることに繋がるとも思います。そういった意味でも、卒業論文の作成は非常に面白く、興味深いものでした。

今回、選考委員の先生方から、各分野の視点に立った様々なアドバイスをいただきました。今までは偏った分野のみ関心が向いていましたが、これからはより広い視野を持って多くの事を学び、研究に活かしていきたいと思っています。

「学修への取り組み」部門

一人一人が主役 「ちくさ日曜学校」

内海 真衣 教育学部人間発達科学科4年

「にちがく」（ちくさ日曜学校）は、知的障害をもつ「学級生」と共に活動する名古屋市青年委託学級のひとつで、主に教育学部の学生で運営しているボランティア団体です。活動は月に2回の日曜日です。教案（活動内容）は学級生の“成長”



2006年4月10日「お花見」教案の時の全体写真（場所は教育学部テラス）今年度最初の教案なので、桜を見ながらお散歩したり、ネームプレートを作ったり、自己紹介できるゲームをして交流を深めました。

と“楽しみ”を願って、「お花見」「ハロウィン」などの季節行事や「キャンプ」「そりすべり」などの旅行、「こんにちは」「ありがとう」といった出会いや感謝の気持ちを大切にするための内容などさまざまです。学級生の年齢は小学生から50歳と幅広く、障害や発達の程度もばらばらで、誰もが参加できて楽しむことのできる内容を考えるのはとても困難です。しかし、学級生の笑顔や楽しかったという声、成長の実感は私たちをやる気にさせてくれます。当日は、学級生とペアになって活動します。にちがくの輪を大切にしながらも、ペアの障害の程度や個性を考慮し、一人一人に応じた参加の仕方を考えながら活動します。

年に1度の勉強会では、障害やにちがくの歴史について勉強したり、学級生のケースカンファレンスを作ったり、親御さんからお話を聞いたりします。また、各教案後の反省会では、その日の学級生の様子の報告や、情報を交換します。

にちがくはとても親しみやすく、楽しみながら障害を理解し、個人としても成長できる場です。にちがくの活動を通して、障害があっても、また何歳になっても、成長でき、ともに楽しむことができることをより多くの方に知っていただけるように活動していきたいと思っています。（ちくさ日曜学校ホームページ：<http://www.geocities.co.jp/HeartLand-Hanamizuki/5581/index.html>）

平成17年度名古屋大学総長顕彰授与式が、3月27日(月)、豊田講堂第1会議室において行われました。名大トピックス155号では各受賞者及び団体一覧を掲載しましたが、本号では受賞者及び受賞団体のことばを紹介します。

「学修への取り組み」部門

幅広い価値観への探求

瀬海 美穂 理学部生命理学科4年

私は大学4年間で単位の数にとらわれず、自分の興味を持った授業を出来る限り受けました。そのため、一面的ではなく多面的に現象を捉えられるようになりました。さらに、日本にのみ通用する知識、常識だけではなく、日本とは異なっ



マンチェスター大学でお世話になった私のスーパーバイザーのニールさん

た物事の捉え方を体感してみたいという思いが強く、一年間イギリスのマンチェスター大学で卒業研究を行いました。留学中は英語のコースやアコモデーションのことで様々な問題がありましたが、それを何とか乗り越えるうちに英語力がつき、日本とイギリスの文化や価値観の違いを体感しました。研究室に初めて行ったところは、イギリスの4年生はほとんど実験を経験したことがないのですが、そういった同じ感覚で扱われ、ほとんど実験を一人で任せてもらえませんでした。しかし、何度も繰り返し、つたない英語で必死に訴えているうちに、自然と研究室に溶け込んでいくことができました。また、イギリスだけに毎週研究室の人たちとサッカーをやるのですが、その中で研究室の人たちともっと仲良くなり、いろんな国の友達を作ることもできました。こういった中で、若いころに英語力を身につけ、異文化を味わう機会が持てたことは大変貴重な財産になりました。このような機会を与えていただきました先生方、さらに一年間、暖かい声援を送ってくれた友達に感謝しています。

これからも、今まで学んだものの考え方は大切にしつつ、それにとらわれすぎず、新しいことに恐れを抱かず見聞をさらに広げていきたいと思っています。

「学修への取り組み」部門

基礎医学研究と米国臨床実習

野坂 宜之 医学部医学科6年

私は医学科3年後期の基礎医学セミナーをきっかけに、「人食いバクテリア」の名で知られるA群レンサ球菌感染症の研究を、細菌学教室にて約2年間、講義や臨床実習の合間を縫って続けてきました。名大細菌学教室では、この感染症



フィラデルフィア小児病院での小児血液科チームとともに

を引き起こしたA群レンサ球菌の病原因子の解明にも取り組んでいます。私もそのチームの一員となり、昨年6月には、アトランタで開催されたアメリカ微生物学会(ASM)第105回総会にて研究成果のポスター発表を行ってまいりました。

また、医学科6年次には、医学部の海外提携校交換留学制度を利用し、ペンシルバニア大学へ3ヶ月間留学してまいりました。実習先のフィラデルフィア小児病院での経験は非常に新鮮で、かつ衝撃的なものであり、また日本の医学教育が参考にすべき点を多く発見し、帰国後学内外においてその報告活動を積極的に行いました。(名大友会時報2005年10月号、医学書院 週刊医学界新聞 医学生・研修医版 2006年2月20日号 http://www.igaku-shoin.co.jp/nwssprr/n2006dir/n2671dir/n2671_08.htm、名大医学部ホームページ <http://www.med.nagoya-u.ac.jp/html/undergraduate/medicine/interchange/index.html>)

このような学生時代の充実した経験を生かして、基礎医学への関心を保ち、世界的な視点を積極的に取り入れながら今後の臨床研修に取り組んでいきたい、ということが私の短期的な目標であります。また、長期的目標としては、大学院へ進学し更なる研究と専門性の獲得を目指し、さらには米国臨床留学にもらみ日々研鑽に励みたいと思っています。

「学修への取り組み」部門

材料工学と生化学の融合

鈴木 翔也 工学部物理工学科4年

私は2006年に名古屋大学工学部物理工学科に入学後、材料工学コースに進学し、金属材料や無機材料などさまざまな材料に関する学習に取り組んで来ました。進学先として材料工学コースを選んだのは、すべての製品の基本となる「材料」を開発することが、様々な製品の性能を上げることに繋がる



実験室で試料を作製しています

と感じ、そんな材料の開発に価値を見いだしたからです。

4年生からは結晶材料工学専攻の竹田研究室に所属し、生体膜と半導体のハイブリッド構造に関する研究に取り組んでいます。本研究はこれまで半導体を主な研究対象としてきた竹田研究室の蓄積の上に新たに挑戦するテーマです。私は「ある分野に精通していながら、周りの関連分野にもある程度の知識を持った研究者」を目指しています。そこで、半導体材料という軸を持った研究室で、生体膜という異種分野を取り入れた研究をすることに興味を持ち、このテーマで研究を行ってきました。

本研究では、「生体膜」材料を扱うのですが、これには私がかつてまで学習してきた材料工学分野とは異なる、生化学の知識が必要とされます。この異分野の学習に関しては、分子科学研究所や立命館大学などの学外の研究者と交流することにより、学習を進めています。さらに、自らが材料工学コースで学習してきた専門知識に基づいて生体膜の振る舞いの解析を進めています。異分野の学問を融合させた研究を行うことで、研究成果を上げることができ、第6回バイオミメティック材料プロセッシング国際シンポジウム、応用物理学会で発表を行いました。

今後も大学院で研究を深め、成果を上げていきたいと思っています。

「正課外活動への取り組み」部門／個人
国際交流分野

中日友好と国際理解に貢献したい

馬 翔 大学院工学研究科社会基盤工学専攻
博士課程前期課程2年

この度、中国と日本の民間交流活動と、大学の留生活動



交流イベントで行われた瀬戸市天空太鼓団の演奏

2004年10月1日中国の建国記念日に開かれた留学生と日本人市民の交流イベントのワンシーンです。

瀬戸市天空太鼓団に素晴らしい演奏をしていただき、会場はたいへん盛り上がりしました。

において総長顕彰をいただきました。名古屋大学大学院に入学したとき、留学生である私は勉学以外に、社会に対しても留学生なりの役割を果たしたいと思いました。この考えのもとに、2004年4月～2005年3月、名古屋地域中国留学生学友会の会長と、2005年1月～2006年1月、全国大学生協連に属する留学生ネットワーク幹事会の副代表をそれぞれ務めて、中日友好と大学キャンパスでの国際交流活動に取り組んでいました。学友会は中国留学生に対して支援を行うと共に、中国と日本のかけはしとなり、民間交流活動を通じて両国の友好を促進することを趣旨としています。私の学友会会長任期中は、留学生も含めた両国民の相互理解と関心を深めることを中心に、本地域の各友好団体の協力をいただき、懇談、見学、募金、記念式典など様々なイベントを行っていました。一方、留学生ネットワークは「私とあなたで作る国境を越えたキャンパスライフ」をテーマとして、去年の10月28日から30日にかけて、東京国立オリンピック記念青少年総合センターにて、「わくわくワークショップ2005」を開催しました。これから私は組織の役員を務めないかもしれませんが、個人として活動にずっと携わっていきたいです。今回の受賞を励みにして、今後新しい道を模索しながら、頑張り続けたいと思います。

「正課外活動への取り組み」部門／団体
国際交流分野

留学生の支援と交流

石川 佳樹 法学部法律政治学科2年

私たち SOLV (School of Law Volunteers) は、名古屋大学法学部の留学生を対象とした支援や交流を目的とする、法学部の学生による法学部公認サークルです。日々の活動は毎週1回行われるミーティングで決定し、各メンバーがそれ



リサイクルフェアにて留学生に商品を説明

ぞれの方法で活動に関わっています。主な支援活動は、新しく名古屋大学にやって来た留学生を空港まで出迎えに行ったり、区役所の各種登録のお手伝いをしたりしています。また、リサイクル品のバザーや法学部が主催する新入留学生の歓送迎会の企画をしています。日常的には、日本語を留学生に教えたり、留学生の学習の手伝いなどをしています。また、留学生と交流する活動として、週一回留学生を交えて昼食をとったり、相撲見学や七夕祭りなどの日本文化を紹介するイベントを開催したり、各国の留学生に料理を作ってもらい、それを持ち寄ってパーティーをするなど、一年を通してさまざまな活動をしています。留学生との交流は私たち日本人学生にとっても、普通の大学生活では体験することのできない世界との出会いであり、人間的に成長できる場でもあると思っています。SOLVはボランティアサークルの名前がついていますが、単に留学生のために活動をしているのではなく、私たち自身も多くのことを学んでいます。現在のSOLVの行事は、主にSOLVメンバーと留学生の参加が中心となっています。今後は事前の広報の充実と誰もが参加しやすい行事作りを通して、一般学生の国際交流の場を作り出していきたいと思っています。

「正課外活動への取り組み」部門／団体
正課外研究活動分野

ゼロからの車両開発とエンジニア教育

名古屋大学フォーミュラチーム FEM 代表
秋山 友彦 工学部物理工学科4年

私たち名古屋大学フォーミュラチーム FEM は毎年、全日本学生フォーミュラ大会へ参戦するべく、競技車両をゼロから企画・設計・製作・テストしています。

大会ではどこよりも戦闘力のあるマシンと、そのマシンを



今年度開発したマシンと大会の様子

販売すると仮定した際の、魅力的な販売戦略が必要とされます。私たちは勝つために、販売拡大と生産コストを考慮した製品企画を何度も議論し、車両運動やエンジンなどの現象解析と計算を重ねた上で、合理的な構造設計に全力を捧げます。それは、時にたった1本のボルトの長さを選定するためだけに何時間も議論と計算を重ねることに表れています。その後、工作機械と溶接により材料を加工し、時間をかけてマシンを作り上げます。事故や怪我を防ぐため、安全管理と教育にも多くの努力を注いでいます。

勝つための開発は決して単純ではなく、常に時間とお金の問題がつきまといきます。それをチームの組織運営と、活動支援を募る渉外活動が支えています。開発が遅いチームは絶対に勝てません。そのため組織運営においては連絡手段や予定管理、ミーティング方法を最大限工夫し、実践しています。資金面では、企業へ直々に支援のお願いに伺ってプレゼンをしています。また、大会後には活動報告会も開催しており、これも重要な活動の一環となっています。

このように本活動では、講義室の枠を越えて数え切れないほどの知識・技術を学ぶことができます。このような場を提供して頂いていることに私たちは感謝するべきであり、さらに今後も優秀なエンジニアの輩出できる環境作りを継続して行きたいと思っています。

医学部附属病院リハビリテーション部理学療法士
佐藤 幸治

PT・OT・ST 何だか解りますか

私が働く医学部附属病院リハビリテーション部では、発病後それほど日が経っていない急性期の患者さんを多く取り扱っているため、早期のリハビリテーション開始に力を入れており、もとの病気の治療と並行してリハビリテーションも積極的に進めていく態勢をとっています。リハビリテーション専門医による評価をもとに、リハビリテーションプランを作成し、8名の理学療法士、3名の作業療法士がそのプランを実行していきます。なるべく訓練器械類に頼らず、治療者が直接手をふれてリハビリテーションを行っていくことをモットーとしており、大学病院であることから、難病、重病の患者様が多いのですが、可能な限り生活の質を高めるとの観点から「あきらめない」リハビリテーションを心がけています。近年、失語症や構音障害、肺炎や外科手術後に起こる嚥下障害に対応するため、言語訓練・摂食・嚥下の専門家である言語聴覚士があらたに加わりました。これにより、リハビリテーション部には、理学療法士（PT）、作業療法士（OT）、言語聴覚士（ST）のスタッフがそろいました。

私が学校に入った26年前は、理学療法士といっても知る人は少なかったのですが、山口百恵の「赤い」シリーズで、車椅子や義足の訓練風景が紹介され、一躍憧れの職業となりました。

リハビリテーションの対象となる疾患も、近年かわってきています。骨肉腫の治療としての下肢切断が、患肢温存手術の普及により行われなくなる一方で、閉塞性動脈硬化症や、糖尿病によるも

のが増えてきていますし、片麻痺は、脳出血由来のものが減り、脳梗塞によるものが増えてきています。脳梗塞は、動脈硬化が主な原因ですが、早期の血栓溶解療法が回復に結び付きます。これらの病気は、現在ある程度治療できるようになりましたが、「メタボリック・シンドローム」が話題となっているように、予防も重要になってきています。一方、高齢化により、骨折や肺炎、閉塞性換気障害、とくに肺気腫が増えており、肺理学療法や、在宅酸素療法に対応したリハビリテーション訓練の需要が高まっています。

リハビリテーション部は、鶴舞公園を望む好立地にあります。大学病院の患者さんは重い障害を持っている方が多く、家庭や仕事、将来に不安を抱えていらっしゃるはずですが、意外にも、訓練室は、皆さん明るく、活気にあふれており、元気になろうと頑張っています。そのような患者さんの明るさに我々はずいぶんと勇気づけられます。一方で患者さんの心のケアも我々の重要な仕事といえます。

リハビリテーションの仕事は、自分でいってしまっただけはおこがましくもありますが、「やりがいのある仕事」です。私はこの仕事で、嫌とか、疲れたとか、感じたことはありません。他の職員も楽しく仕事をしているようです。この気持ちのまま、退職するときまでいられたら、幸せな人生を送れていると言うことでしょうか。

PT・OT・STは患者さんと仕事が大好きな医療技術者です。



さとう こうじ
1957年生まれ。1984年社会医学技術学院理学療法学科卒業後、名古屋大学医学部附属病院に就職。現在、運動療法室主任。

平成18年度教育学部附属学校入学式を挙行

平成18年度名古屋大学教育学部附属学校入学式が、4月6日（木）、豊田講堂において挙行され、杉山副総長、理事及び来賓出席の下、中学校2クラス79名、高等学校3クラス120名の生徒を新たに迎えました。

豊田附属学校長は、式辞の中で、4月から同校がスーパー・サイエンス・ハイスクール（SSH）の研究指定を受け



祝辞を述べる豊田附属学校長

たことに触れ、「本校が目指す SSH は理科・数学にとどまらず、文系や芸術系等、幅広い素養を備えた思考力を持った人材育成を目指すもので、中学・高校・大学を見通したトータルな学力を育むことに取り組む」と述べられました。その後、SSHの第一期生である本年度入学者に対する激励の言葉が贈られました。その中で、豊田附属学校長は、ニュートンと同じ時代に生きた日本の科学者、三浦梅園の話を取り上げ、「雷が鳴るのはなぜか」という、異常な状態に着目するのではなく、“雷が今、鳴っていないのはなぜか”という平常な状態の中に問いを立てるといふ、発想の転換を大切にすること、また、既成の知識を頭の中にインプットするのではなく、身近なものに照らし合わせて「いつでもどこでもそうなのか」という問いを立て、皆で追究すること、そして名古屋大学のキャンパスの中にあるという地の利を生かし、疑問を携えてさまざまな研究室を訪問することという、三つの学習スタイルを提案されました。

教育学部附属中・高等学校が、大学との連携をより一層深めながら、SSHの研究開発に取り組んでいくことを印象づけた入学式でした。

中山恭子氏の講演会を開催

●大学院法学研究科

元ウズベキスタン共和国特命全権大使、元内閣官房参与で、現在、早稲田大学大学院アジア太平洋研究科客員教授である中山恭子氏の講演会が、4月5日（水）、法学部第3講義室において、法学部新入生歓迎講演会「新入生に期待すること」として開催されました。講演会には、200名以上の法学部新入生及び保護者で立ち見ができるほど盛況になり、聴衆は熱心に講演を聞き入りました。



講演する中山氏

中山氏は、講演会で、学生時代にフランスへ留学して、日本の文化とヨーロッパの文化の違いを痛烈に感じたこと、ワシントンの国際通貨基金で働いていた時に、きちんと言葉で表現することがいかに大切であるかを痛感したことについて、述べられました。その上で、現在の国際社会では、国際的なテロの問題をはじめとして、非常にとげとげしい現実があるが、このぎくしゃくとした国際社会を少しでも穏やかでゆるやかなものにし、平和な国際社会を造っていく上で、日本の持っている文化は非常に大きな役割を果たすことができるし、できるはずであると強調されました。聴衆の学生に対しては、「日本は、国際社会の平和のために貢献することができる、そのためにも日本の文化を大切にしていきたい。皆さんが基本を身に付けて、社会に出て働く頃には、日本が国際社会の中で色々な意味で貢献できる時代になっていると思われるので、この4年間しっかりと身体も心も鍛えてその日に備えていきたい。」と期待を込めて話されました。最後に、中山氏は、本学法学部は、ウズベキスタンやタジキスタンと非常に強い関わりがあり、本学は、全国で最も活発に海外との関係を扱い、支援をしている大学である、と話されました。

NTT 及び NTT 西日本と連携実施協定、 新日鐵及びデンソーと研究インターンシップ協定を締結

●大学院工学研究科

大学院工学研究科は、3月23日（木）に、日本電信電話株式会社（NTT）及び西日本電信電話株式会社（NTT 西日本）と連携実施協定を、また、3月16日（木）に、新日本製鐵株式会社（新日鐵）と、3月24日（金）に、株式会社デンソー（デンソー）と、それぞれ研究インターンシップ協定を締結しました。なお、NTT 及び NTT 西日本との連携実施協定については、大学院情報科学研究科とも連携をとりつつ締結したものです。

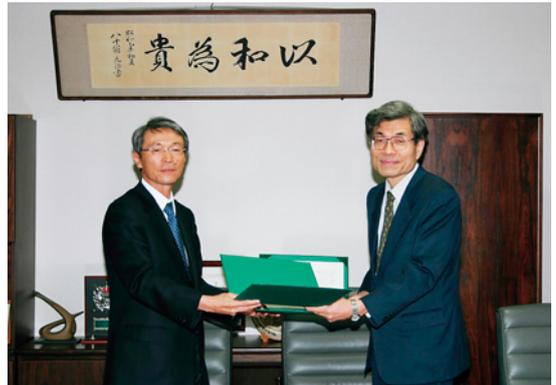
NTT 及び NTT 西日本と締結した連携実施協定は、21世紀型の情報通信技術に係わる学問・事業分野を対象にして、①NTT と同研究科それぞれの研究・開発の強化と加速及び学術的活動の活性化、②NTT 西日本での研究成果の事業推進化、③研究インターンシップによる学生教育等人材育成プログラムの推進を目指します。

新日鐵及びデンソーとの研究インターンシップ協定は、平成17年度にスタートした同研究科・大学院情報科学研究科と株式会社東芝との研究インターンシップと同様、博士課程前期課程及び後期課程の学生を対象に、1～6カ月の長期にわたり派遣先企業において先端的・実践的な研究課題に取り組むものです。

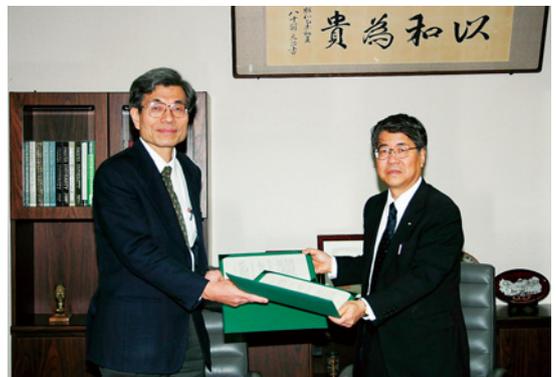
NTT と締結した協定に基づいて行われる研究インターンシップも含め、より幅広い分野で研究インターンシップを行うことが可能となりました。



NTT 及び NTT 西日本との連携実施協定式



新日鐵との研究インターンシップ調印式



デンソーとの研究インターンシップ協定調印式

シンポジウム「災害弱者をどう救うかー外国人への情報提供を考えるー」を開催

●大学院環境学研究科、災害対策室

シンポジウム「災害弱者をどう救うかー外国人への情報提供を考えるー」が、3月18日（土）、環境総合館において、開催されました。

シンポジウムでは、最初のプログラムで「災害時における外国人への情報提供と支援のあり方」を主題に、阪神・淡路大震災や新潟県中越地震で実際に外国人対応に当たっ



パネルディスカッションの様子

たNPO法人 多文化共生センターの田村太郎氏、長岡市国際交流センターの羽賀友信氏から実態と課題について講演が行われました。

その後のプログラムでは「地震を迎え撃つ東海地域で、私たちが今すべきこと」と題したパネルディスカッションが行われ、英文情報誌「アベニューズ」の佐藤久美氏、財団法人浜松国際交流協会の三池 アリセ ミホ氏、田中京子留学生センター助教授、木村玲欧環境学研究科助手や会場の参加者が加わり、外国人が多い東海地域における課題と備えのあり方が議論されました。

外国人が災害時に意思疎通を図れるよう簡単な日本語を使える支援について、地震への理解を促す支援について、また、地域コミュニティに属さない外国人の救援に必要な精神についてなど、さまざまなテーマで、プログラムの時間を超えて、熱心な議論がされました。

大学院環境学研究科、災害対策室は、今後も各部局や組織と連携してユニークな企画を開催していく予定です。

愛知県教育特区「知の探究コース」初の修了生

●大学院環境学研究科

大学院環境学研究科は、平成16年度に開始した「あいち・知と技の探究教育特区」と題した、高等学校と大学とをつなぐ試みに、全学に先駆けて協力しました。

「自然の見方を学ぶ」というテーマを掲げ、昨年度は附属地震火山・防災研究センターを中心として、同研究科3専攻の協力の下に、「知の探検講座」（受講者16名）を実施しました。



森部さん（左）と加藤さん（右）の成果発表会の様子

今年度は「知の探究コース」として、千種高校2年加藤慶一さんと明和高校2年森部千絵さんが選抜されました。2人は週1日大学に通い、学習と研究を行いました。まず固体地球物理学の学部生向け講義と実験に参加し、基礎知識を学び、大学の雰囲気を体験しました。さらに、演習や野外実習、観測への参加、担当教員とのディスカッションを通じて学習を深め、研究テーマに取り組みました。

加藤さんは藤井直之同研究科教授、渡辺俊樹同研究科助教授の指導の下、地震時の地殻変動の解析に取り組み、「GPSから求めた2003年十勝沖地震の余効滑り」という研究発表をまとめました。森部さんは「1945年三河地震の被災者へのインタビュー」に取り組み、林 能成同研究科助手、木村玲欧同研究科助手とともに被災者宅を訪れて体験談を聞き、地震災害の記憶を記録として残す作業を行いました。2人は、成果発表会で「学会発表として十分通用する。」と賛辞を得、「週1日分で学校の勉強に追いつくのは大変でしたが、大学でいろいろな知識やものの考え方を学び、楽しかった。また参加したい。」と感想を語りました。先輩との交流もよい経験になったようです。なお、コースの履修時間は高等学校の卒業単位に認定されます。

附属図書館 2006年春季特別展を開催

「地獄物語の世界—江戸時代の法と刑罰—」



展示会の様子

附属図書館は、新入生歓迎の時期とあわせ、4月10日（月）～5月5日（金）の日程で春季特別展を開催しました。

今回、タイトルとなった「地獄物語」は、同館所蔵「神宮皇学館文庫」の悉皆調査から見つかったもので、伊勢松坂の富豪志士・世古延世（のぶつぐ）が安政大獄で経験した獄中体験（大量のシラミに悩まされる話ほか、同囚や牢番から聞いた珍談奇談が横溢）を綴った希有な記録です。

この「地獄物語」については、悉皆調査を担当している塩村 耕文学研究科教授のもとで、同館職員有志による「古書の会」が、丹念に資料の翻刻・注釈を行い、また現地である松坂も探訪するなどの調査を進めてきました。

実際の展示では、こうした成果をもとに、「地獄物語」の世界をより深く理解するため、地元松阪の方々や、東北大学附属図書館から世古延世に関わる貴重な資料を借りたほか、神保文夫法学研究科教授の協力のもと、同研究科所蔵の法制史料や附属図書館高木家文書等をあわせ展示することで、「地獄物語」の背後にある江戸時代の法と刑罰の実態から現代の法のあり方についても考える企画としました。

開催期間中は、約1,000名の来場者があり、会場では、

配布された「図録ガイド」や、展示資料（くずし字）を翻刻した「展示資料ガイド」を手に、興味深く資料に見入る姿がみられました。

また、4月15日（土）のギャラリートークでは、雨天にもかかわらず約120名の参加があり、文学と法学のコラボレーション（極悪の状況下で書かれた世古の作品に漂うユーモアに触れつつ、自らの死を意識したうえで、その数奇な体験を後世に伝えようとする彼の気迫と傑出した人間的境涯を示した「ドキュメンタリー文学としての地獄物語」（塩村 耕文学研究科教授）、時代劇でお馴染みの大岡越前と遠山の金さんを例に、当時の法システム及び実際の裁判事例を織り込みながら、その虚像と実像を縦横に語った「白洲と牢屋—江戸の裁判事情」（神保文夫法学研究科教授）という、得難い組み合わせの講演に熱心に耳をかたむけるとともに、時間を延長しての活発な質疑が繰り広げられました。

なお、本展示とは別に、関連資料等を集めた第2展示室では、「電子展示 地獄物語の世界」も公開され、「地獄物語」の画像にカーソルをあわせると、翻刻された文字が浮き上がる仕掛けに感嘆の声があがるなど、好評を博しました。



ギャラリートークで講演する塩村教授



ギャラリートークで講演する神保教授

外国人留学生日本語研修コース開講式を挙

●留学生センター

留学生センター外国人留学生第54期日本語研修コースの開講式が、4月12日（火）、国際開発研究科8階オーディトリウムにおいて、挙

行されました。日本語研修コースは、4月から9月までの6ヶ月間、集中的に日本語の基礎について教育を行うもので、今回は17カ国・地域から新たに渡日した28名の留学生が受講します。



記念撮影の様子

開講式では、始めに江崎光男留学生センター長があいさつし、「もったいない」、「みっともない」、「ほっとけない」という日本語を引用し、それぞれの言葉の持つ意味を通して、これから本学の研修生として勉強する心構えについて話しました。

続いて、研修生全員が留学の抱負や6ヶ月後の受入先、専門分野の研究等について英語と日本語を織り交ぜながら自己紹介を行いました。

開講式の後、記念撮影を行い、引き続き行われた懇親会では、来賓の方から、6ヶ月後の日本語の上達を期待する旨のあいさつがあり、研修生と受入れ教員、研修を担当する日本語講師が懇談しました。

「名古屋大学新入生のためのスタディティップス」を制作

●高等教育研究センター

高等教育研究センターから、新入生向けの学習ハンドブック「名古屋大学新入生のためのスタディティップス」シリーズが刊行されました。このシリーズは本学の新入生が大学で学ぶことの意味を理解し、大学での学習活動を充実できるようにするためのアイデアや実践方法がまとめられた冊子です。4月の新入生ガイダンスで学習支援教材として新入生全員に配布されました。

今回は第1号「学識ある市民をめざして」と、第2号「自発的に学ぼう」の2冊がリリースされました。第1号では、大学で学ぶことはどういうことか、大学で学ぶ際に守らな

ければならないルールとはどういうものか、などについてわかりやすく説明されています。第2号では、本学の新入生が学習を自発的にできるようになるための具体的な方法論がわかりやすく示されています。先輩学生や教員からのアドバイス、コラム、イラスト、チェックリストなどが盛り込まれ、新入生が読みやすい内容になっています。

大学での学習活動に適應できるかどうかは、主体性・自律性・自発性を身につけられるかどうか重要とされています。さまざまな研究結果によると、特に入学後の半年間が重要な意味を持つとされています。「本学でも学ぶことを楽しめない学習者が多いので、本シリーズにより、主体的に学ぶためのきっかけを提供していきたい」と著者は語っています。



「スタディティップス①」の表紙



「スタディティップス②」の表紙

本冊子は本学の学生・教職員には無料で配布されています。ご希望の方は高等教育研究センターまでご連絡下さい。

(連絡先：info@cshe.nagoya-u.ac.jp)

ICCAE 2005年度第9回オープンセミナーを開催

●農学国際協力教育研究センター

農学国際教育協力研究センター（ICCAE）は、3月22日（水）、平成17年度第9回オープンセミナーを生命農学研究科 A-338室において開催しました。国際協力銀行（JBIC）から出向している澤井克紀同センター客員教授が、「JBIC 業務と大学連携－ベトナム灌漑事業を例にして－」と題して、平成17年4月からプロジェクト開発研究領域の



第9回オープンセミナーの様子

松本哲男同センター教授と共同研究してきた JBIC の戦略と大学との連携実施に関する研究成果を発表しました。研究対象として JBIC がベトナムにおいて ODA 事業として計画している「ファンリー・ファンティエット灌漑事業」の研究開発関係の調査を本センターに業務委託した経緯と共に、委託過程で生じた諸問題から今後の課題として、大学の事務的手続きとサポート体制の整備、国内外でのカウンターパートの確保、コンサルタントとの連携と差別化について貴重な指摘がなされました。講演後、出席者から JBIC との連携強化のための活発な質問が出され、討議が弾みました。

ICCAE 2006年度第1回オープンセミナーを開催

●農学国際協力教育研究センター

農学国際教育協力研究センター（ICCAE）は、4月4日（火）、生命農学研究科 A-338室において、「アフリカ人づくり拠点（AICAD）－地域開発のアプローチおよびネリカ米振興事業」と題し、平成18年度第1回オープンセミナーを開催しました。国際協力機構（JICA）がケニアで進めているアフリカ人づくり拠点（AICAD）プロジェクトの榎原大悟専門家が、AICAD の組織と機能、現在特に力を



第1回オープンセミナーの様子

入れているコミュニティ強化による地域開発へのアプローチ、また、東アフリカのケニア、ウガンダ、タンザニアにおけるアフリカの新しい稲として注目を浴びているネリカ米普及のための事業について現状と問題点を説明しました。

AICAD は、東アフリカ3カ国を対象に、大学研究者の研究開発支援事業、研修普及事業及び情報管理事業を通して、貧困削減に役立つ人材の育成を推進しています。大学研究者の研究を地域開発に結びつけることや地域住民が主体的に地域開発に取り組むことに対する難しさはありますが、今後の AICAD のリーダーシップに期待するところは大きいと感じられました。また、ネリカ米事業については、信頼できる地域適応試験データの蓄積と土壌生産力の維持管理技術や乾燥ストレスの克服技術及び優良種子の確保の必要性が強調されました。

当日は大学院生命農学研究科、大学院工学研究科、大学院国際開発研究科の教員及び大学院生、ケニアからの客員研究員のほか、学外からも含め20名以上の参加者が、アフリカにおける地域開発の重要性や難しさ、ネリカ米普及の問題点などについて熱心に討論し、その重要性・緊急性と貧困削減の難しさを改めて認識する機会になりました。

ICCAE 2006年度第2回オープンセミナーを開催

●農学国際協力教育研究センター

農学国際教育協力研究センター（ICCAE）は、4月11日（火）、平成18年度第2回オープンセミナーを生命農学研究科 A-338室において開催しました。

国際農林水産業研究センター（JIRCAS）の坂上潤一氏は、西アフリカのギニアで続けている長期栽培試験を基に、天水農業条件下では乾燥ストレスと激しい降雨の時に起こ



第2回オープンセミナーの様子

るイネの水没による冠水ストレスの両方が大きな問題で、それぞれのストレスに耐性の強いイネの開発が重要であることを指摘しました。

同センターの客員研究員として来日中の、ケニア国立農業研究所のコレ主任研究員は、ケニアでトウモロコシや小麦に比べて米の消費が急激に伸びており、米の国内生産が急務であり、現在全国的に展開しているネリカ米品種の地域適合試験をさらに進めて、増産に貢献したい意向を強調し、本学との今後の連携に大きな期待を抱いている、と話されました。

当日は生命農学研究科の教員や大学院生、留学生など約20名の参加者が、東アフリカと西アフリカにおける稲作条件の違いやネリカ米普及をどのように進めるのかなどについて熱心に討論し、問題の重要性と緊急の取り組みの必要性を改めて認識する機会になりました。

博物館が「日韓オカリナ交流」コンサートを開催

平成17年度卒業式が行われた3月27日（月）の昼休みに、博物館において、韓国オカリナ音楽協会会長のパク・ボン・ギユ氏らによるオカリナ演奏会が行われました。

コンサートは、パク氏の解説（通訳は大学院法学研究科大学院生イ・ソン・ヨンさん）に続いて、「上を向いて歩こう」



オカリナの演奏をする韓国オカリナ協会のみなさん

や「おじいさんの時計」などの日本の曲、「済州の王子」や「冬のソナタ」などの韓国の曲、「You are my sunshine」や「I will follow you（讚美歌）」などの西洋の曲が、3グループ20人によって次々と演奏されました。演奏は、大小様々なサイズのオカリナに、太鼓やキーボードなども交えて伸びやかに行われました。

演奏会の最後には、中部オカリナ協会に属する5名の日本人も加わり、全員で「アリラン」の大合奏が行われ、会場は大いに盛り上がりました。

コンサート終了後、韓国におけるオカリナ音楽の現状、音楽教育、伝統音楽とオカリナ音楽の関係などに関する質問があり、パク氏が質問に丁寧に答えていました。こうした質疑応答により、参加者は日本と韓国の音楽環境の違いについても知ることができ、約80名の聴衆はオカリナによる日韓交流を堪能していました。

新任部局長等の紹介

●大学院文学研究科長・文学部長

町田 健
(まちだ けん)

専門分野：言語学
(略歴)

昭和61年4月 東京大学助手 (文学部)
平成元年11月 愛知教育大学助教授 (教育学部)
平成4年4月 成城大学助教授 (文芸学部)
平成8年4月 北海道大学助教授 (文学部)
平成10年10月 名古屋大学教授 (文学部)
平成12年4月 名古屋大学教授 (大学院文学研究科)
平成16年11月 名古屋大学大学院文学研究科副研究科長
(～平成18年3月31日)
平成18年4月 名古屋大学大学院文学研究科長・文学部長
(～平成20年3月31日)



●大学院教育発達科学研究科長・教育学部長

寺田 盛紀
(てらだ もりき)

専門分野：職業教育学
(略歴)

昭和62年1月 金沢大学助教授 (教育学部)
平成7年4月 名古屋大学助教授 (教育学部)
平成9年4月 名古屋大学教授 (教育学部)
平成12年4月 名古屋大学教授 (大学院教育発達科学研究科)
平成16年4月 名古屋大学教育研究評議会評議員 (～平成18年3月31日)
平成16年4月 名古屋大学大学院教育発達科学研究科副研究科長
(～平成18年3月31日)
平成18年4月 名古屋大学大学院教育発達科学研究科長・教育学部長
(～平成20年3月31日)



●大学院法学研究科長・法学部長

松浦 好治
(まつうら よしはる)

専門分野：法情報論、法思想史
(略歴)

昭和51年4月 中京大学講師 (法学部)
昭和54年4月 中京大学助教授 (法学部)
昭和57年4月 大阪大学助教授 (法学部)
平成3年1月 大阪大学教授 (法学部)
平成11年4月 大阪大学教授 (大学院法学研究科)
平成12年4月 名古屋大学教授 (大学院法学研究科)
平成14年4月 名古屋大学教授 (法政国際教育協力研究センター)
平成15年4月 名古屋大学訟務室長 (～平成16年3月31日)
平成16年4月 名古屋大学教授 (大学院法学研究科)
平成16年4月 名古屋大学法務室長 (～平成18年3月31日)
平成18年4月 名古屋大学大学院法学研究科長・法学部長
(～平成20年3月31日)



●大学院経済学研究科長・経済学部長

荒山 裕行
(あらかやま ゆうこう)

専門分野：農業政策
(略歴)

昭和61年10月 名古屋大学講師 (経済学部)
昭和63年1月 名古屋大学助教授 (経済学部)
平成5年4月 名古屋大学助教授 (大学院国際開発研究科)
平成8年4月 名古屋大学助教授 (経済学部)
平成12年4月 名古屋大学助教授 (大学院経済学研究科)
平成15年4月 名古屋大学教授 (大学院経済学研究科)
平成16年8月 名古屋大学教育研究評議会評議員 (～平成18年3月31日)
平成18年4月 名古屋大学大学院経済学研究科長・経済学部長
(～平成20年3月31日)



●大学院国際開発研究科長

西村 美彦
(にしむら よしひこ)

専門分野：農村開発論、国際開発協力運営論、
熱帯営農体系技術 (作付体系)

(略歴)

昭和44年4月 国際協力事業団 (JICA)
平成9年10月 名古屋大学教授 (大学院国際開発研究科)
平成18年4月 名古屋大学大学院国際開発研究科長
(～平成20年3月31日)



●大学院多元数理科学研究科長

金銅 誠之
(こんどう じげゆき)

専門分野：代數幾何学
(略歴)

昭和61年4月 東京電機大学助手 (理工学部)
平成2年4月 埼玉大学助教授 (理学部)
平成7年4月 名古屋大学助教授 (大学院多元数理科学研究科)
平成13年3月 名古屋大学教授 (大学院多元数理科学研究科)
平成16年4月 名古屋大学教育研究評議会評議員 (～平成20年3月31日)
平成17年12月 名古屋大学大学院多元数理科学研究科長事務取扱
(～平成17年12月31日)
平成18年1月 名古屋大学大学院多元数理科学研究科長
(～平成19年3月31日)



新任部局長等の紹介

●大学院環境学研究科長

林 良嗣
(はやし よしつぐ)

専門分野：交通工学
〈略歴〉

昭和54年4月 東京大学助手（工学部）
昭和55年7月 東京大学講師（工学部）
昭和56年4月 名古屋大学講師（工学部）
昭和57年4月 名古屋大学助教授（工学部）
平成4年4月 名古屋大学教授（工学部）
平成9年4月 名古屋大学教授（大学院工学研究科）
平成13年4月 名古屋大学教授（大学院環境学研究科）
平成18年4月 名古屋大学大学院環境学研究科長（～平成20年3月31日）



●年代測定総合研究センター長

中村 俊夫
(なかむら としお)

専門分野：年代学
〈略歴〉

昭和55年9月 名古屋大学アイソトープ総合センター教務職員
平成2年6月 名古屋大学助教授（年代測定資料研究センター）
平成11年8月 名古屋大学教授（年代測定資料研究センター）
平成12年4月 名古屋大学教授（年代測定総合研究センター）
平成18年4月 名古屋大学年代測定総合研究センター長
（～平成20年3月31日）



●博物館長

西川 輝昭
(にしかわ てるあき)

専門分野：動物分類学・系統学、海洋生物学
〈略歴〉

昭和54年4月 名古屋大学助手（教養部）
昭和58年4月 名古屋大学講師（教養部）
昭和63年12月 名古屋大学助教授（教養部）
平成4年4月 名古屋大学助教授（大学院人間情報学研究科）
平成9年7月 名古屋大学教授（大学院人間情報学研究科）
平成12年4月 名古屋大学教授（博物館）
平成18年4月 名古屋大学博物館長（～平成20年3月31日）



●大学文書資料室長

羽賀 祥二
(はが しょうじ)

専門分野：日本近代史
〈略歴〉

昭和54年4月 京都大学助手（人文科学研究所）
昭和63年4月 立命館大学助教授（文学部）
平成6年4月 名古屋大学助教授（文学部）
平成10年4月 名古屋大学教授（文学部）
平成12年4月 名古屋大学教授（大学院文学研究科）
平成18年4月 名古屋大学大学文書資料室長（～平成20年3月31日）



●法政国際教育協力研究センター長

鮎京 正訓
(あいきょう まさのり)

専門分野：比較法文化論、ベトナム憲法史
〈略歴〉

昭和54年5月 名古屋大学助手（法学部）
昭和58年1月 名古屋大学講師（法学部）
昭和59年4月 岡山大学助教授（教養部）
平成4年4月 名古屋大学教授（大学院国際開発研究科）
平成12年4月 名古屋大学教授（大学院法学研究科）
平成18年4月 名古屋大学法政国際教育協力研究センター長
（～平成20年3月31日）



●工学部・工学研究科事務部長

位田 敏夫
(いんでん としお)

〈略歴〉

昭和42年7月 名古屋大学医学部附属病院分院
昭和61年5月 名古屋大学庶務部人事課第一給与掛主任
昭和62年4月 岡崎国立共同研究機構総務部庶務課文書法規係長
平成元年5月 名古屋大学理学部人事掛長
平成7年3月 名古屋大学庶務部人事課課長補佐
平成7年4月 富山商船高等専門学校庶務課長
平成8年7月 佐賀大学庶務部人事課長
平成11年4月 岡崎国立共同研究機構総務部人事課長
平成13年4月 群馬大学総務部人事課長
平成15年4月 奈良女子大学総務課長
平成16年4月 奈良女子大学総務・企画課長
平成18年4月 名古屋大学工学部・工学研究科事務部長



新任部局長等の紹介

●医学部・医学形研究科事務部次長

青山 生修
(あおやま いくのぶ)



〈略歴〉
昭和43年5月 名古屋大学厚生課
昭和62年5月 名古屋大学経理部主計課総務掛主任
平成元年5月 名古屋大学空電研究所会計掛長
平成9年4月 北陸先端科学技術大学院大学研究協力部
研究協力課課長補佐
平成12年4月 名古屋大学工学部・工学研究科経理課専門員
平成14年4月 名古屋大学経理部主計課課長補佐
平成16年4月 名古屋大学財務部財務課財務調整主幹
平成17年4月 名古屋大学医学部・医学系研究科管理課長
平成18年4月 名古屋大学医学部・医学系研究科事務部次長

●エコトピア科学研究所事務長

青山 正晴
(あおやま まさはる)



〈略歴〉
昭和49年8月 名古屋大学経理部経理課
平成元年6月 名古屋大学経理部主計課第二予算掛主任
平成4年4月 核融合科学研究所管理部会計課司計係長
平成6年4月 名古屋大学理学部経理掛長
平成13年4月 名古屋大学経理部主計課専門員
平成15年1月 名古屋大学経理部主計課課長補佐
平成16年4月 名古屋大学財務部財務課課長補佐
平成17年4月 名古屋大学財務部財務課財務調整主幹
平成18年4月 名古屋大学エコトピア科学研究所事務長

新名誉教授のこぼ



優秀な学生を確保するには

三田 一郎 大学院理学研究科教授

ゆとりの教育で育った学生たちがいよいよ大学に入学する。この機会に12年先のことを考え、どうしたら入学生の質が向上するか考える。わたしは大学入試を考え直す必要があると思う。現在のようなスーパークイズではなく、一人ひとりの学生が人生を有意義に過ごすための訓練を12年間させる入試をデザインすることが不可欠である。

先進国の子供たちは生後すぐに大学受験を目指して走る。良い大学に入学するにはまず良い幼稚園。これは人間の根本的な競争意識から生じるものであり、非難してもしようがない。うまく利用する方法を考えよう。入試は各大学の学長の責任で行われる。従って大学で自由に執行できるのだ。大学が独自の理想的な大学生のイメージをもち、その理想を目指して12年間努力させるような入学試験をデザイン出来るはずだ。もし仮に創造力豊富で、様々な福祉活動に興味を持ち、優れた運動神経の持ち主を選抜したければ、子供たちが大学を目指すことによって自然とこの様な学生に育つ入試をデザインすればよい。選抜基準を明確に公表すれば世間全体がその試験に合格するように動く。

創造力は筆記試験のみで評価できない。よくテレビで見るロボットコンテストを考えてみよう。学生達が真剣にチャレンジに向かう熱気が視聴者にも伝わってくる。高校3年生を対象に、全国的な科学コンテストを行い、その成果を評価することは同じような効果がある。福祉活動に参加したことを入試で評価することはこの活動への最初の一步を踏み出す良い

機会になる。スポーツに関連した活動を評価すれば学生達は大きい体を鍛えるであろう。このような評価に向かって12年間入試の準備をすることは、かりに第一志望の大学に入学できなくても決して人生設計に無駄ではない。

現在、国立大学でこのような選抜方法が行われていない理由は、原因は間違った公平性と、入試にかかる手間である。「可否は明確に説明できる必要がある。1点差でそれが決まってもそれは公平である。」などとの発言を何回か耳にした。さらに、この方法は手間が省ける。このような考え方を貫くとスーパークイズで可否を決めることになる。

大学はそれぞれ固有の教育理念をもち、その教育方針に沿った学生を選抜する。このように考えると試験の点数よりも、学生の様々な特長を総合的に判断するほうが納得いく選抜ができる。もちろんこの方法は非常に手間がかかり、教員だけで選抜するのは不可能である。学生選抜のプロを育成し彼等に選抜を任すことになる。

大学だけでは閉じない問題も残っている。12年間の楽しい「受験戦争」を指導する教員の育成が不可欠である。基礎科学でのコンテストの必要性を述べたが、高校の教員が大学で行われている研究に加わるようになれば、高校生もこのようなチャンネルを通して本場の研究に浴け込める。

最後になりましたが、14年間お世話になりました。今後様々な改革によって名古屋大学が発展することをお祈りいたします。



法医学と大学の社会貢献

勝又 義直 大学院医学系研究科教授

私は、定年まで1年を残して名古屋大学を退職し、4月から科学警察研究所長として、千葉県柏市で新たな生活をスタートしました。昭和37年に名古屋大学医学部に入学以来、44年間にわたり学生、教員と途切れることなく名古屋大学に在籍し、本当に多くの方にお世話になりました。この場をお借りしてお礼申し上げます。

若いうちは生化学、病理学と専門を変えましたが、昭和53年からは法医学を専門とするようになり、昭和61年には教授を拝命しました。以降、法医学教室を20年間主宰しました。

法医学は「法律上問題となる医学的事項を研究し解明する学問」と言えます。法医学分野では、教育・研究のほか司法解剖などの実務があることが知られています。司法解剖は、ご遺体が発見され、犯罪の疑いがある場合に捜査上の観点から解剖を囑託されるもので、全国では年間6000体程度あり、ほとんどが各地の大学法医学教室の医師に依頼されます。社会における治安の維持の根幹を担っている大切な業務であり、その意味では大学の重要な社会貢献であると考えています。私は、名古屋大学在職中に882体の司法解剖を行いました。また、そのほかに、裁判で双方の見解が対立するような重要事件において意見を求められる書類鑑定、困難なケースでのDNA鑑定など、その他の鑑定も多く行いました。

研究面では、最新の科学技術の法医学分野への応用の研究を多く行いました。そのほかに、医学・医療と社会とが対立するような問題についての研究にも力を入れました。

最近、医学・医療と社会との対立で目立っているのは、終末期における尊厳死のあり方と、医療過誤における医師の業務上過失致死などの処罰の問題です。終末期では、過剰な延命医療とあって人工呼吸器を外した場合に、指針がないために殺人と受け取られてしまう例が相次いでいます。また、医師不足の中で、難しい手術を強いられ、患者を死亡させた医師が逮捕される事件があり、医学・医療側の強い反発が起っています。患者・家族のために行った医療行為で罪に問われるとなると、積極的な医療が行いにくくなってしまふことが心配されています。やはり、ここは医学・医療側と社会が十分な対話を行い、適切な対応を定めていくことが必要と思われる。

名古屋大学においては、これまで様々な分野で重要な社会貢献がなされてきたと思いますが、今後はそれらの社会貢献をしっかりとアピールしていくことが大切だと感じております。この面においても、名古屋大学の皆様のますますのご健闘を祈念しております。



日本語教育の拠点大学として更なる発展を

尾崎 明人 留学生センター教授

名古屋大学には1991年4月から本年3月まで15年間勤務しました。この間、名大日本語教育の充実を目指して助け合った同僚の皆さん、そして常に支えてくださった事務の皆さんには本当にお世話になりました。心からお礼を申し上げます。

私が着任した当時、すでに名古屋大学の日本語教育プログラムは日本語教育界で高い評価を得ていました。国費研究留学生のニーズに的確に応える教科書の開発、コンピュータを利用した授業、日本語日本文化研修生に対する充実したカリキュラムなど名古屋大学の日本語教育は先駆的な取り組みで広く知られており、プログラムの内容と規模において国立大学の中でトップレベルにありました。

留学生センターが創設された1993年当時、名古屋大学の留学生数は600名ほどでしたが、現在ではおよそ1200名と倍増しています。この間、短期日本語プログラム、日韓予備教育プログラムが新たに設けられ、さらに全学の大学院生、研究生などを対象とする全学向け日本語講座も大きく拡充されました。

量的拡大だけでなく、ビジターセッションやホームビジット、話題中心のカリキュラムなどコミュニケーション能力を伸ばすためのさまざまな試みを積極的に行い、教育内容も充実させました。日本語教育メディアシステム開発部門の創設を契機として、マルチメディア教材の開発やオンラインによる初級文法と漢字教材の提供、あるいは中上級の読解・作文

コースの開設など、IT技術を活用した教育も着実に進めてきました。日本語教員全員が取り組むFD活動も活発ですし、社会連携の一環として行っている日本語ボランティア支援の活動も徐々に拡大しています。この15年を振り返り、名大の日本語教育が着実に発展してきたことを改めて実感します。日本語教員の一人としてこのような発展に多少なりとも貢献できたことを誇りに思います。

しかしながら、取り組むべき課題もまた少なくありません。とりわけ、日本語教育予算が削減される中で留学生へのサービスを如何にして維持していくかが大きな課題です。大学の中期目標を念頭におき、日本語教育の重要性、必要性について全学的な理解を得ながら、より効率的な日本語教育の体制と教育方法を作り上げていくことが日本語教員に課せられた大きな仕事です。センターの皆さんがこの困難な課題に果敢に取り組み、日本語教育の拠点大学としてさらにプログラムを充実させていくことを期待しています。

本年4月からは名古屋外国語大学で教鞭を取ります。名古屋大学でのさまざまな経験を生かし、日本語教育の人材づくりに貢献したいと願っています。

15年間本当にお世話になりありがとうございました。

役員等

総長	平野 眞一
理事（総務・企画関係担当）・副総長	大峯 巖
理事（人事・労務関係担当）・副総長	佐分 晴夫
理事（病院・施設整備・環境安全関係担当）・副総長	杉浦 康夫
理事（教育関係担当）・副総長	杉山 寛行
理事（研究・国際交流関係担当）・副総長	山本 進一

経営協議会委員

学外委員	
(独)農林漁業信用基金副理事長	加藤 鐵夫
名城大学学長	兼松 顯
お茶の水女子大学学長	郷 通子
(財)長寿科学振興財団理事長	小林 秀資
トヨタ自動車(株)相談役、(株)デンソー取締役副会長	齋藤 明彦
東レ(株)代表取締役社長	榊原 定征
日本ガイシ(株)代表取締役会長	柴田 昌治
(株)ナゴヤドーム副社長	角田 牛夫
伊藤忠商事(株)取締役会長	丹羽宇一郎

(五十音順)

教育研究評議会評議員

総長	平野 眞一
理事	大峯 巖
理事	杉山 寛行
理事	山本 進一
文学研究科長	町田 健
教育発達科学研究科長	寺田 盛紀
法学研究科長	松浦 好治
経済学研究科長	荒山 裕行
情報文化学部長	佐野 充
理学研究科長	近藤 孝男
医学系研究科長	濱口 道成
工学研究科長	澤木 宣彦
生命農学研究科長	松田 幹
国際開発研究科長	西村 美彦
多元数理科学研究科長	金銅 誠之
国際言語文化研究科長	近藤 健二
環境学研究科長	林 良嗣
情報科学研究科長	阿草 清滋
環境医学研究所長	児玉 逸雄
太陽地球環境研究所長	藤井 良一
エコトピア科学研究科長	松井 恒雄
附属図書館長	伊藤 義人

理事（財務・事務総括関係担当）・事務局長	豊田 三郎
理事（法務関係担当）	林 光佑 ※
副総長（産学官連携関係担当）	宮田 隆司
参与	奥村 洋彦 ※
監事	木村 洋一
監事	湯本 秀之 ※

※印は非常勤

学内委員

総長	平野 眞一
理事・副総長	大峯 巖
理事・副総長	佐分 晴夫
理事・副総長	杉浦 康夫
理事・副総長	杉山 寛行
理事・副総長	山本 進一
理事・事務局長	豊田 三郎
医学部附属病院長	井口 昭久
附属図書館長	伊藤 義人

医学部附属病院長	井口 昭久
総合保健体育科学センター長	島岡 清
文学研究科	和田 壽弘
教育発達科学研究科	氏家 達夫
法学研究科	定形 衛
経済学研究科	金井 雄一
理学研究科	佐藤 正俊
医学系研究科	河村 守雄
工学研究科	早川 義一
生命農学研究科	服部 重昭
国際開発研究科	大室 剛志
多元数理科学研究科	庄司 俊明
国際言語文化研究科	吉村 正和
環境学研究科	神沢 博
情報科学研究科	横澤 肇
教育研究共同施設連合選出	江崎 光男
教育研究共同施設連合選出	小林 迪弘
評議会選出	佐藤 彰一
評議会選出	濱田 道代
評議会選出	小野木克明
評議会選出	足立 守

総長補佐

目標・評価担当	松下 裕秀
法人法規・個人情報管理担当	市橋 克哉
総務・広報担当	渡辺 芳人
情報担当	坂部 俊樹
人事労務・人権（苦情処理）担当	和田 肇
男女共同参画担当	東村 博子
人権（セクハラ）担当	唐澤かおり
鶴舞地区担当	祖父江 元
施設整備担当	谷口 元
労働安全担当	山根 隆
教育担当	山本 一良

教育担当（研究推進担当兼務）	木俣 元一
国際連携担当	早川 操
社会連携・社会貢献担当	戸田山和久
研究推進担当	芝井 広
研究推進担当（教育担当兼務）	木俣 元一
研究・教育支援担当	中村 新男
財務担当	木村 彰吾
財務担当	石田 幸男
法務担当	本間 靖規
産学官連携担当	竹田 美和
産学官連携担当	太田美智男

部局長等

本部		
事務局	事務局長	豊田 三郎
総務部	総務部長	永田 幸男
	総務課長	服部 幸博
	総合企画課長	神谷 考司
	総合企画室主幹	松岡真一郎
	人事労務課長	筏津 隆広
	人事主幹	虎澤 千恵
財務部	財務部長	松川 誠司
	財務課長	佐藤 規朗
	財務調整主幹	井沢 文雄
	経理課長	芳賀 洋和
	資産管理課長	樋口 博則
	契約課長	今津 範通
	情報企画課長	多田 正和
	研究協力・国際部	研究協力・国際部長
研究支援課長		伊藤 信浩
社会連携課長		石代 真敏
国際課長		北條 泰親
施設管理部	施設管理部長	山口 博行
	施設企画課長	須崎 茂弘
	施設整備課長	細野 俊治
	施設管理課長	加藤 好孝
学務部	学務部長	中村 直規
	学務企画課長	木之下英二
	学生総合支援課長	高橋神奈男
	入試課長	磯部 剛利

運営支援組織	産学官連携推進本部長	宮田 隆司
	産学官連携推進本部連携推進部長	武田 穰
	産学官連携推進本部知的財産部長	笠原久美雄
	国際交流協力推進本部国際企画室長	早川 操
	情報連携統括本部情報戦略室長	坂部 俊樹
	環境安全衛生推進本部環境安全衛生推進室長	山根 隆
	施設計画推進室長	谷口 元
	環境安全衛生管理室長	山根 隆
	核燃料管理施設長	榎田 洋一
	評価企画室長	松下 裕秀
	セクシュアル・ハラスメント相談所長	近藤 孝晴
	社会連携推進室長	戸田山和久
	災害対策室長	鈴木 康弘
	国際学術コンソーシアム推進室長	早川 操
	男女共同参画室長	東村 博子
	法務室長	本間 靖規
広報室長	渡辺 芳人	
リスク管理室長	大峯 巖	
総合企画室長	大峯 巖	

監査室	監査室長	佐分 晴夫
-----	------	-------

教養教育院	教養教育院長	若尾 祐司
高等研究院	高等研究院長	北住 炯一
文学部・文学研究科	文学研究科長・文学部長	町田 健
	文学部・文学研究科事務長	根津 郁夫
教育学部・教育発達科学研究科	教育発達科学研究科長・教育学部長	寺田 盛紀
	附属中学校長	豊田ひさき
	附属高等学校長	豊田ひさき
	教育学部・教育発達科学研究科事務長	浅田 貞彦

法学部・法学研究科	法学研究科長・法学部長	松浦 好治
	法学部・法学研究科事務長	横田 圭介
経済学部・経済学研究科	経済学研究科長・経済学部長	荒山 裕行
	附属国際経済政策研究センター長	高桑宗右工門
	経済学部・経済学研究科事務長	石原 達夫
情報文化学部	情報文化学部長	佐野 充
	情報文化学部・情報科学研究科事務長	河西 志郎
理学部・理学研究科	理学研究科長・理学部長	近藤 孝男
	附属臨海実験所長	澤田 均
	附属南半球宇宙観測センター長	福井 康雄
	理学部・理学研究科・多元数理科学研究科事務長	森本 正廣
医学部・医学系研究科	医学系研究科長・医学部長	濱口 道成
	附属医学教育研究支援センター長	太田美智男
	附属神経疾患・腫瘍分子医学研究センター長	高橋 雅英
	附属病院長	井口 昭久
	大幸医療センター長	濱嶋 信之
	医学部・医学系研究科事務部長	松川 保
	事務部次長	中島 勉
	事務部次長	青山 生修
	総務課長	伊藤 健一
	人事労務主幹	松永 和雄
	学務課長	中村 平
	経営企画課長	谷口 哲也
	経営分析主幹	平手はるえ
	調達課長	松倉 有三
	医事課長	大岩 淳一
	包括評価主幹	野口 信子
工学部・工学研究科	工学研究科長・工学部長	澤木 宣彦
	工学部・工学研究科事務部長	位田 敏夫
	総務課長	松川 和彦
	経理課長	岡田 秀
	教務課長	伊藤 幹夫
農学部・生命農学研究科	生命農学研究科長・農学部長	松田 幹
	附属農場長	柳沼 利信
	附属演習林長	柴田 叡弑
	附属山地畜産実験実習施設長	福田 勝洋
	農学部・生命農学研究科事務長	篠崎太嘉男
総合保健体育科学センター	総合保健体育科学センター長	島岡 清
国際開発研究科	国際開発研究科長	西村 美彦
多元数理科学研究科	多元数理科学研究科長	金銅 誠之
国際言語文化研究科	国際言語文化研究科長	近藤 健二

環境学研究科	環境学研究科長	林 良嗣
	附属地震火山・防災研究センター長	山田 功夫
	附属交通・都市国際研究センター長	日比野高士
	環境学研究科・地球水循環研究センター事務長	山本 明博
情報科学研究科	情報科学研究科長	阿草 清滋
	附属組込みシステム研究センター長	高田 広章
環境医学研究所	環境医学研究所長	児玉 逸雄
	附属近未来環境シミュレーションセンター長	水村 和枝
	環境医学研究所事務長	柳 育生
太陽地球環境研究所	太陽地球環境研究所長	藤井 良一
	附属ジオスペース研究センター長	小島 正宜
	太陽地球環境研究所事務長	社本 好由
エコトピア科学研究所	エコトピア科学研究所長	松井 恒雄
	ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー長	水谷 孝
	エコトピア科学研究所事務長	青山 正晴
附属図書館	附属図書館長	伊藤 義人
	医学部分館長	山内 一信
	研究開発室長	伊藤 義人
	附属図書館事務部長	早瀬 均
	情報管理課長	牧村 正史
	情報サービス課長	中井えり子
	情報システム課長	渡邊 俊彦
	地球水循環研究センター	地球水循環研究センター長
情報連携基盤センター	情報連携基盤センター長	渡邊 豊英
	情報連携基盤センター事務長	伊藤 正彦
学内共同教育研究施設等	アイソトープ総合センター長	西澤 邦秀
	遺伝子実験施設長	石浦 正寛
	留学生センター長	江崎 光男
	物質科学国際研究センター長	巽 和行
	高等教育研究センター長	戸田山和久
	農学国際教育協力研究センター長	竹谷 裕之
	年代測定総合研究センター長	中村 俊夫
	博物館長	西川 輝昭
	発達心理精神科学教育研究センター長	本城 秀次
	法政国際教育協力研究センター長	鮎京 正訓
	生物機能開発利用研究センター長	小林 迪弘
	先端技術共同研究センター長	大日方五郎
	情報メディア教育研究センター長	山本 一良
	大学文書資料室長	羽賀 祥二
	学生相談総合センター長	鈴木 國文
	留学生相談室長	松浦まち子
その他	全学技術センター長	山本 進一

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成18年3月16日～4月15日]

記事	月日	新聞等名
1 奈良先端科学技術大学との研究チームが血管を収縮させる酵素の構造や働く仕組みを解明	3.16 (木)	サンケイ
2 「ITS スマートモール検討会 (代表・森川高行・環境学研究科教授)」のプロジェクトの一環で、ETC 車載器を活用して携帯電話端末へ地域情報などを提供する実験が22日から3日間、名古屋・栄のセントラルパーク地下駐車場で行われる	3.16 (木)	中日 (朝刊)
3 豊嶋英明・医学系研究科教授らの疫学調査で、同じ量だけ食べても早食いの人の方が太りやすいことが判明	3.17 (金)	中日 (朝刊)
4 UFJ セントラルリースによる寄附講義「環境問題への挑戦」を4月から3年間開講 一般市民に開放し、学内外の専門家が講義する	3.17 (金)	日刊工業
5 忘れがたき津山：中部大学学長・山下興亜・本学名誉教授	3.18 (土)	読売
6 文部科学省は新年度から紀伊半島沖に新観測網を構築する 安藤雅孝・環境学研究科附属地震火山・防災研究センター教授は「地震前後も含めたあらゆる過程を観測でき、メカニズムの解明が進む」と期待	3.19 (日)	朝日 (朝刊)
7 ほとけたちのイメージを探る：宮治昭・文学研究科教授 来世の幸福願う漆喰彫刻、ストウッコ像	3.19 (日)	中日 (朝刊)
8 独立行政法人教員研修センターは、「教員研修モデルカリキュラム開発プログラム」事業で「教育上の重要課題に関する研修」に本学など15件を採択	3.19 (日)	朝日 (朝刊)
9 「インド美術仏教美術研究会」25日に大学院文学研究科で開催	3.19 (日) 3.22 (水)	中日 (朝刊) 朝日 (夕刊)
10 今年の大学入試、志願傾向：河合塾の調べでは、「難関国立大」13校の志願者は前年度比3.5%増で、中でも旧帝大では本学の人気上昇が目立ち、7.9%増だった	3.20 (月)	中日 (朝刊)
11 附属図書館2006年春季特別展『『地獄物語』の世界―江戸時代の法と刑罰』4月10日から5月5日まで開催	3.20 (月)	中日 (朝刊)
12 森川高行・環境学研究科教授らは三菱重工業や NTT データなどと共同で、交通渋滞緩和を狙い、違法駐車車両などに課金する新システム「駐車デポジット型流入マネジメント」の試験運用を検討している 森川教授は「公共交通機関の利用を促し、都心部の渋滞緩和による CO ₂ 削減効果もある」と強調する	3.21 (火)	日経 (朝刊)
13 指定席：初代広報室長として奮闘する渡辺芳人・理学研究科教授	3.21 (火)	読売
14 「第9回東海・北陸地区病院経営シンポジウム」が3月4日に開催され、松尾清一・医学系研究科教授は「大学が医師に『この病院に行け』という時代は終わった。医師派遣を希望する医療機関は、自ら医師を招くための魅力ある体制作りに取り組むことが大切だ」と訴えた	3.21 (火)	読売
15 私の卒論体験：学生之新聞スタッフで卒論発表会を行い、発表後、参加したスタッフのうち長谷川佳美さん・本学学生ら文系女子6人が集まって感想を話した	3.21 (火)	中日 (朝刊)
16 活動通信：本学環境サークル「Song of Earth」 卒業生から要らなくなった家具や家電を回収して新入生に譲る「名古屋大下宿用品リユース市」に取り組む	3.21 (火)	中日 (朝刊)
17 学生就職支援団体「Onn」での活動に力を入れてきた加藤真也さん・情報文化学部4年生は、「この支援活動で得た多くの経験や大切な仲間、すべてを自分の誇りとして、4月から社会人としての一歩を踏み出したい」と話す	3.21 (火)	中日 (朝刊)
18 本学体育会の歴史や活動を紹介する博物館特別展「スポーツと名古屋大学 する・みる・つくる」を22日から開催	3.22 (水)	中日 (朝刊)
19 「インド文化の会」28日に開催 畝部俊也・文学研究科助教授が「シヴァ神を讃える魔王ラーヴァナ」をテーマに語る	3.22 (水)	朝日 (夕刊)
20 中部地方の地域づくりを考える「国土形成計画シンポジウム」が22日に開催され、林良嗣・環境学研究科教授らのパネルディスカッションなどが行われた	3.23 (木)	中日 (朝刊)
21 書評：「いじめ問題の発生・展開と今後の課題」今津孝次郎・教育発達科学研究科教授著	3.23 (木)	中日 (朝刊)
22 大学院工学研究科は23日、NTT、NTT 西日本と情報実施協定を締結 共同研究や大学院生を対象としたインターンシップなどの人材育成、人的交流を進める	3.24 (金)	毎日 (朝刊) 他4社
23 愛知県は27日、「愛知県産業創造計画推進委員会」を発足 産学官約20人の委員で構成し、委員長に山田基成・経済学研究科助教授が就任	3.24 (金)	日刊工業
24 名古屋シネマテークが始めた不定期講座「映画の放課後」第1回は31日に開催 中西久枝・国際開発研究科教授が話した後、アッバス・キアロスタミ監督の「ホームワーク」を上映する	3.24 (金)	朝日 (夕刊)
25 福井康雄・理学研究科教授、水野範和・同助手らの研究グループは地球から約20万年離れた大小マゼラン星雲を結ぶガスの帯「マゼラニックブリッジ」で星を生み出すとされる「分子雲」を8個発見	3.25 (土) 3.26 (日)	中日 (朝刊) 他4社
26 忘れがたき庄原：國原吉之助・本学名誉教授	3.25 (土)	読売
27 愛・地球博の開幕1周年を記念した「EXPO2005交流の夕べ」とシンポジウム「市民で創る持続可能な社会」が24日に開催 シンポジウムで EXPO エコマネーの企画にかかわった森川高行・環境学研究科教授は「持続可能な社会をつくるには、市民一人一人が自発的に変わるしかない。その取り組みを発信できた」と語った	3.25 (土)	毎日 (朝刊) 読売
28 進化する「万博」：愛・地球博理念継承エリア検討委員会委員長を務める平野眞一総長は「大勢の人がいつでも集まれ、成功の記憶を何世代にもわたって感じられる施設が必要。我々委員も知恵を絞るが実際にやるのは県だ」と話す	3.25 (土)	読売

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成18年3月16日～4月15日]

記事	月日	新聞等名
29 ほとけたちのイメージを探る：宮治昭・文学研究科教授 アジェンターの涅槃像で永遠の悟りの世界を実感	3.26 (日)	中日 (朝刊)
30 富山県立中央病院で臓器移植法に基づく脳死と判定された患者から摘出された心臓などの移植手術が行われ、医学部附属病院では30歳代女性に肝臓を移植、執刀した木内哲也・医学系研究科教授は記者会見で「女性の容態は安定している」と話す	3.27 (月)	中日 (朝刊) 他2社
31 2003年に工学研究科に入学した福田正さんが68歳で工学博士号を取得し、27日に卒業 博士論文は工業廃水から金属を取り除き再利用する技術についてで、「今後は実用化を目指したい」と研究は続く 松田仁樹・工学研究科教授は「実社会の経験豊かな福田さんの話に刺激を受けた学生も多かった」と語る	3.27 (月) 3.28 (火)	中日 (朝刊) 日経 (朝刊) 日刊工業
32 訃報：早川文夫・本学名誉教授	3.27 (月) 3.28 (火)	中日 (朝刊) 読売 日刊工業
33 東京大学などとの研究グループがX線天文衛星「すざく」の高性能 CCD カメラを使って、生命を形作る有機物に必要な炭素が年老いた星の内部から宇宙へ放出される現場を初めて観測	3.27 (月)	朝日 (夕刊)
34 27日、豊田講堂で卒業式が行われ、大学院生1860人、学部生2178人が巣立つ 平野眞一総長は式辞で「名古屋大学の卒業生は『実直』『実力』『誠実』など誉め言葉をもらうが、一方で『組織をリードする覇気が弱い』とも言われる。驕ることなく、しかしその特長を大切に、そして直すところは努力して直してもらいたい」と激励した	3.27 (月) 3.28 (火)	中日 (夕刊) 他3社
35 2008年度入試から文、理、医、農の4学部で後期日程の募集を廃止すると発表	3.28 (火)	中日 (朝刊) 朝日 (朝刊)
36 永井科学技術財団は2005年度の財団賞に社本英二・工学研究科教授ら8件と国際交流助成金に宇治原徹・同助教授ら2件を選定	3.28 (火)	中日 (朝刊) 日刊工業
37 市橋克哉・法学研究科教授らが9日にウズベキスタンのタシケント国立法科大学を訪れ、大学院法学研究科が昨年9月に設立した「名古屋大日本法教育センター」の発足を記念し、構内の庭園に桜の苗11本を植樹 市橋教授は「毎年春が来れば花を開く桜のように、学術交流を進展させていきたい」と話す	3.28 (火)	中日 (朝刊)
38 第18回名古屋大学防災アカデミー「地震惚け日本人―長期評価の10年」4月17日に開催	3.29 (水)	中日 (朝刊)
39 中部地方、大卒・院卒の採用増加：本学では求人票が昨年の2倍、処理が追いつかず開封されないままの求人票が山積みになり「売り手市場」の様相を鮮明にしている	3.29 (水)	日経 (夕刊)
40 ひとり暮らしを始める前に：入学シーズンを前に「ピア・サポート」の学生たちが実技研修に励む 指導にあたる杉村知美・発達心理精神科学教育研究センター助教授は「サークル活動に参加している学生は三割を切り、人間関係が希薄になっている。こうした場をきっかけにつながりが広がれば」と期待 鶴田和美・発達心理精神科学教育研究センター教授は「どんなわずかなことでも気軽に相談して」と呼び掛ける	3.30 (木)	中日 (朝刊)
41 厚生労働省が2月に実施した今年度の医師国家試験の合格者を発表 本学の大学別合格率は94.4%	3.30 (木)	中日 (朝刊) 読売
42 4月1日に大学院情報科学研究科内に「附属組込みシステム研究センター」を開設 第1弾プロジェクトとしてトヨタ自動車と共同で、カーナビゲーションなどに組み込まれる基本ソフト (OS) の研究開発を始める	3.31 (金)	朝日 (朝刊) 他3社
43 第15回漢方シンポジウムが2月26日に開催 井口昭久・医学部附属病院長の講演「老いと病」など	3.31 (金)	読売
44 「～新しい中部のかたち～国土形成計画シンポジウム」が22日に開催 林良嗣・環境学研究科教授らによるパネルディスカッションなど	3.31 (金)	中日 (朝刊)
45 財団法人「名古屋都市センター」の新理事長に松尾稔・本学名誉教授が就任	3.31 (金)	中日 (朝刊)
46 大学院文学研究科の男性教授からセクシュアル・ハラスメントを受け心的外傷後ストレス障害になったとして休学中の女子学生が、教授に慰謝料など3300万円の支払いを求めた訴訟の判決が名古屋地裁であり、学生側の請求が棄却された	3.31 (金)	中日 (朝刊) 朝日 (朝刊)
47 ひと：戸田友介さん・M-easy 代表取締役は本学工学部卒業後2年で起業 社員は社長を含め役員ばかり3人で、2役員も教育学部と理学部の卒業生 お年寄りや障害者らが、どこでも手軽に農業のできるシステムの開発に力を入れる	3.31 (金)	朝日 (朝刊)
48 築く多文化共生：ブイ・チ・トルンさんは留学生として来日、言葉を早く覚えることと周りのサポートの大切さを痛感し、本学在学中から日本人学生と交流を図る留学生の会の設立や国際会議などの通訳も買って出た	3.31 (金)	読売
49 医学部・医学系研究科と医学部附属病院が1日から敷地内禁煙を実施 2ヶ所に喫煙指定場所を置くが1年後には撤廃し、完全禁煙にする 濱口道成・医学部長は「喫煙は吸わない人にも明らかに健康被害を及ぼす。医療従事者の卵が育つ大学で実施することも意味がある」と話す	4. 1 (土)	中日 (朝刊)
50 後手民主、地方に打撃：後房雄・法学研究科教授コメント「野党第一党は政権を奪取することに全力をあげるべき。次の代表は最低でも次の総選挙までに党を率い、党全体でその代表を支持することが必要」	4. 1 (土)	朝日 (朝刊)
51 科学技術と未来を考えるタウンミーティングが1日に日本科学未来館で開催 理化学研究所理事長・野依良治・本学特別教授は子どもたちと一緒に化学実験に取り組み、「実験は具体的な感動を与える。人生に大きな意味を持つのは実験や体験だとあらためて感じた」と語る	4. 2 (日)	読売

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成18年3月16日～4月15日]

記事	月日	新聞等名
52 読売新聞社は2006年度、読売新聞記者が講師を務める「読売新聞特別講座」を東海地方で本学など5大学で開設 本学ではアジア諸国からの留学生に英語での講義が行われる	4. 2 (日)	読売
53 名古屋大学こすもす保育園が3日に開園 平野眞一総長は「研究拠点の名古屋大学の魅力となるような保育園にしたい」と語る	4. 3 (月) 4. 4 (火)	朝日 (夕刊) 日経 (夕刊) 読売
54 スポーツと名古屋大学：東田和弘・博物館助手 1964年に本学ヨット部OBが日本人初となる太平洋往復航海に出発し、翌年11月、名古屋港に無事帰還した	4. 4 (火)	中日 (朝刊)
55 民主党どう出直すか：後房雄・法学研究科教授 安直な代表選挙から転換し、最大限に開かれた代表選挙が急務	4. 4 (火)	朝日 (朝刊)
56 視点：進む車のコンピューター化 組込みシステム向けのオープンソース開発を進めるトッパーズプロジェクト(会長・高田広章・情報科学研究科教授)が自動車制御分野の取り組みを拡大している	4. 4 (火)	日刊工業
57 文部科学省は2006年度のスーパーサイエンスハイスクールに教育学部附属中学・高校など31校を指定	4. 4 (火)	中日 (朝刊)
58 各地の大学や研究機関で研究者の倫理や行動規範を明文化する動き：本学では研究・国際交流委員会内に研究者倫理についての規定を検討するワーキンググループを立ち上げ、現在、たたき台となる案を作成中	4. 4 (火)	朝日 (夕刊)
59 「名古屋大学下宿リユース市」4日に開催 電気用品安全法の影響で、多くの家電製品が販売ができなくなり、無償譲渡で代金の代わりにカンパを募る方法に変更となった 企画した学生らは協力を呼び掛ける	4. 5 (水)	朝日 (朝刊)
60 日本鉄鋼協会は奥村直樹会長の後任に浅井滋生・工学研究科教授を選出	4. 5 (水)	日刊工業
61 入学式が5日に豊田講堂で開催され、学部生2224人と大学院生2338人が入学 平野眞一総長は「道は自分で切り開くもの。自分探しに逃げずに、置かれている場で最大限の努力をしてほしい」と激励した	4. 5 (水) 4. 6 (木)	中日 (夕刊) 朝日 (夕刊) 読売
62 附属図書館の所蔵する資料から見つかった幕末の獄中体験記「地獄物語」を江戸時代の法と刑罰についての関連文書とともに10日から一般公開する 秋山晶則・附属図書館研究開発室助教授は「裁判員制度導入などで法律への関心が高まる機会に、江戸時代の法や刑罰を知って、現代や将来の制度を考えるきっかけにしてほしい」と話す	4. 5 (水)	朝日 (夕刊)
63 公開シンポジウム「流域で見る洪水ハザード」15日に開催	4. 5 (水)	朝日 (夕刊)
64 対人力を磨く：今年初めて、高等教育研究センターの教員らが編集した小冊子「名古屋大学新入生のためのスタディティップス」を入学後のガイダンスで配布 近田政博・同センター助教授は「学生の知的発達には、人間関係を築ける能力を育てることが重要。多様な価値観を持つ人から刺激を受け、自分の考えを発展させて欲しい」と新入生にエールを送る	4. 6 (木)	読売
65 老年学：井口昭久・医学系研究科教授 時差に酔って父の幻想	4. 6 (土)	朝日 (朝刊)
66 町田泰則・理学研究科教授と笹部美知子・研究員のグループは、植物細胞が分裂する最終段階にあたる「細胞板形成」を制御しているたんぱく質の構造や働きを解明	4. 7 (金)	中日 (朝刊) 読売
67 浅井滋生・工学研究科教授らのグループは、電磁場を利用した材料製造技術について、中国の東北大学、韓国の浦項産業科学研究院との共同研究に取り組む	4. 7 (金)	日刊工業
68 大学院環境学研究科はアジア諸国の臨海地域での自然災害対策を進めるため、南山大学や鳥取大学と協力してタイ、インドネシア、ベトナム、バングラデシュの4ヶ国の大学と共同研究を始める リーダーを務める海津正倫・同研究科教授は「地域の特性を研究して、現場の状況にあった対応を考えたい」と話す	4. 7 (金)	中日 (夕刊)
69 人類初の宇宙飛行に成功した1961年4月12日を記念した世界的催し「ユーリズ・ナイト」が8日、中部地方で初めて開催され、メンショフ・イゴール・工学研究科助教授の講演などが行われた	4. 9 (日)	中日 (朝刊)
70 本学に3つの「新入生」：地下鉄名城線名古屋大学駅構内に設置された「電子掲示板ディスプレイ」、愛・地球博の会場で使用された看板を再利用した布製の案内板、仕事と子育ての両立を支援する「こすもす保育園」	4.11 (火)	中日 (朝刊)
71 大学院理学研究科に「南半球宇宙観測研究センター」を設置、センター長に就任した福井康雄・同研究科教授は「国内の若手研究者を受け入れて一級の研究者に成長できる環境を提供し、日本の天体観測をリードする研究拠点にしたい」と話す	4.11 (火)	中日 (朝刊)
72 名大サロンの主役：近藤滋・理学研究科教授 動物のしま模様発生の原理を紹介	4.11 (火)	中日 (朝刊)
73 COE オープンレクチャー「ポスト・ローマ期ヨーロッパのコミュニケーション問題 ーラテン語はいつから話されなくなったかー」19日に開催 佐藤彰一・文学研究科教授が話す	4.11 (火)	朝日 (朝刊) 中日 (朝刊)
74 名古屋市交通局は、加藤博和・環境学研究科助教授ら有識者でつくる名古屋市交通事業経営委員会を設置 27日に初会合を開く	4.11 (火)	中日 (朝刊)
75 市民講座「なごや環境大学」の実行委員会の総会が10日に開催され、学長の名古屋都市センター理事長・松尾稔・本学名誉教授は「全国でも先進的な取り組みで、成功するかどうかを試金石となる。課題を抽出し、より良いものにしたい」とあいさつした	4.11 (火)	中日 (朝刊)
76 トムソンサイエンティフィックが10日、1995年1月～2005年12月の11年間に大学・研究機関の論文が他の論文に引用された回数を指標にした世界の研究機関ランキングを発表 本学は世界97位、国内総合ランキング5位	4.11 (火)	日経 (朝刊) 読売

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成18年3月16日～4月15日]

記事	月日	新聞等名
77 レーザー：浅井滋生・工学研究科教授 品質高度化のための連続鋳造技術などで、学術面のサポートを厚くして、どこにも負けない強さを維持できるよう貢献したい	4.12 (水)	日刊工業
78 名古屋城整備計画案をまとめた名古屋城跡全体整備計画検討委員会の委員長・飯田喜四郎・本学名誉教授が11日に名古屋市役所を訪れ、松原武久市長に検討結果を報告	4.12 (水)	中日 (朝刊) 読売
79 「ITS スマートモータル検討会」は11日にさまざまな電波メディア活用の実験結果などをまとめた報告書を発表 代表の森川高行・環境学研究科教授は「人と街が利便性の高い情報交流を進めるために電波メディアを活用した各種ツールが大変有効である」との認識を示すとともに「実用化に向けた新しい試みを継続的に実施していく必要がある」と語る	4.12 (水)	中日 (朝刊)
80 2006年度東海テレビの番組審議会委員に福和伸夫・環境学研究科教授ら	4.12 (水)	中日 (朝刊)
81 愛知県青少年保護育成条例違反容疑で本学大学院生を逮捕	4.12 (水)	毎日 (朝刊) 他4社
82 新入生に配布するパンフレット「地震防災ガイド」の留学生版 (英語表記) を初めて作成 田中京子・留学生センター助教授は「日本人なら分かる災害の対応など、災害文化から分かりやすい英語で紹介した」と話す	4.13 (木)	毎日 (朝刊)
83 文部科学省が「科学技術関係人材のキャリアパス多様化促進事業」に乗り出し、実施機関として、本学など8つの大学・機関を選定	4.13 (木)	日刊工業
84 ナビゲーター：高田広章・情報科学研究科教授は、車へのコンピューター技術搭載が進む中で、ソフト技術者の確保が課題となりつつあるが、「数だけが問題ではなく、全体のレベルをどう上げていくかが重要」と語る	4.14 (金)	日刊工業
85 岐阜県が所有する研究所6施設の長期放置が判明：竹内信仁・経済学研究科教授コメント「県はすぐにでも放置していた理由を県民に説明する責任がある。財産管理の面で怠慢だと言わざるを得ない」	4.14 (金)	読売
86 医学部附属病院は14日、3月下旬に甲状腺の摘出手術を受けた10代の女性が、手術後、多量の内出血を起こして呼吸停止し昏睡状態となる医療事故が起きたと発表	4.14 (金) 4.15 (土)	中日 (夕刊) 他4社

第9回名古屋大学博物館特別展

「スポーツと名古屋大学 -する・みる・つくる-」

博物館では、3月22日（水）から第9回特別展「スポーツと名古屋大学-する・みる・つくる-」を開催しています。「名古屋大学でスポーツの展示？」とか、「見るものがあるの？」という声をしばしば聞きますが、そんな心配は無用です。名古屋大学といえば、研究や教育が真っ先に頭に浮かびますが、実はスポーツでも、オリンピック金メダリストや学生横綱、何人ものアジア・全日本代表選手を輩出するなど、華々しい歴史を持っています。今回の展示では、そのようなあまり知られていない、本学のスポーツの歴史を紹介します。

また、現役部員による「運動部紹介コーナー」も見どころです。ここは各部によって工夫を凝らして作られており、ありきたりな部活紹介ではなく、奇想天外な展示や、思わず笑ってしまうような展示、感心してしまう展示が満載で、「名大生もなかなかやるじゃん!」と思われれます。このコーナーでは、ふだん目にするもの、手にすることのできない用具（ヨット、ボート、和弓、アーチェリー、剣道具、アメフトやラグビーのボール、馬術具、陸上のハンマー、各部ユニフォーム、その他いろいろ）に実際に触れられるのも特徴です。

さらに、今回の特別展にあわせて、総合保健体育科学センターの教員により全12回のスポーツ科学連続講座や、様々なイベントが行われます。みなさんの参加をお待ちしています。



見学する平野総長



見学をする研修中の新人職員

スポーツ科学連続講座

場 所：博物館講義室

時 間：14時45分～

- 日 時：4月12日(水) 「滑る科学 -フィギュアスケート&スキー-」
 4月26日(水) 「運動、筋肉、宇宙の関係をスポーツ科学の観点から考えよう」
 5月10日(水) 「スポーツモチベーションを探る!」
 5月24日(水) 「スポーツのボールの社会史」
 6月14日(水) 「サッカーファンタジスタの科学」
 6月28日(水) 「ボールゲームに求められる身体スキル
 -ラグビーを中心とした国際競技力-」
 7月12日(水) 「運動しないとどうなる? -衰えを科学する-」
 7月26日(水) 「スポーツと心の発達」
 8月(日時未定) 「複雑な運動の獲得」
 8月(日時未定) 「スポーツと体力」
 9月(日時未定) 「スポーツとファッション」
 9月(日時未定) 「健康運動の科学」

クラブデー

- 5月20日(土) ヨット部 OB総会(関係者のみ)
 6月10日(土) 和式馬術部 流鏑馬デモンストレーション
 (附属高校グラウンドにて、参加自由)
 (日時未定) 相撲部 稽古見学とちゃんこ試食
 (日時未定) 少林寺拳法部 演武



「運動部紹介コーナー」現役部員が自ら工夫を凝らして作りました。



スポーツ科学連続講座

「滑る科学 -フィギュアスケート&スキー-」を講演する池上康男
 総合保健体育科学センター教授

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

3月22日(水)～9月30日(土)

場 所：博物館展示室
時 間：10時～16時
休 館 日：日・月曜日
入 場 料：無料

第9回名古屋大学博物館特別展

テ ー マ：スポーツと名古屋大学ーする・みる・つくるー



[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

5月24日(水)

場 所：博物館講義室
時 間：14時45分～16時15分
入 場 料：無料

第52回特別講演会

演 題：スポーツのボールの社会史
講 師：出原泰明総合保健体育科学センター教授

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

5月25日(木)

場 所：環境総合館レクチャーホール
時 間：17時30分～19時
入 場 料：無料

第19回防災アカデミー

演 題：鉄筋コンクリート造住宅の耐震性能
講 師：勅使川原正臣環境学研究所教授



[問い合わせ先]

災害対策室 052-788-6038

6月14日(水)

場 所：博物館講義室
時 間：14時45分～16時15分
入 場 料：無料

第53回特別講演会

演 題：サッカーファンタジスタの科学
講 師：布目寛幸総合保健体育科学センター助教授

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

6月14日(水)～7月14日(金)

場 所：文系総合館7階
カンファレンスホール
募集対象：一般社会人、大学生・大学院生
募集人数：60名(先着順)
受 講 料：7,200円
申込締切：5月31日

平成18年度大学院国際言語文化研究科公開講座

テ ー マ：恐怖を読み解くー日々の生活から国際政治までー



[問い合わせ先]

国際言語文化研究科事務室
052-789-5245

6月17日(土)

場 所：東郷町諸輪畑94
生命農学研究科附属農場
「農業館」
時 間：14時～16時
定 員：60名
参 加 費：無料

地域貢献特別支援事業「都市近郊の農業教育公園」講演会

テ ー マ：地球のもう一つの成功者昆虫に学ぶ
演 目：農業をする昆虫
講 師：梶村 恒生命農学研究科助手

[問い合わせ先]

附属農場事務掛 0561-37-0210

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

6月28日(水)

場 所：博物館講義室
時 間：14時45分～16時15分
入 場 料：無料

第54回特別講演会

演 題：ボールゲームに求められる身体スキル
ーラグビーを中心とした国際競技力ー
講 師：佐々木 康総合保健体育科学センター助教授

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

名大トピックス No.156 平成18年5月25日発行

編集・発行／名古屋大学広報室

本誌に関するご意見、ご要望、記事の掲載などは広報室にお寄せください。

名古屋市千種区不老町（〒464-8601）

TEL. 052-789-2016 FAX. 052-788-6272 E-mail kouho@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

名大トピックスのバックナンバーは、名古屋大学のホームページ
(<http://www.nagoya-u.ac.jp/topics/>) でもご覧いただけます。

表紙

五月晴れの空に映える
文系総合館。
(平成18年4月28日)



49 鏡ヶ池 一名大の70年とともに

1939（昭和14）年に名古屋帝国大学として創立され、まもなく70年をむかえる名大ですが、残念ながら東山キャンパスには当時からの建築物は残っていません。ただ、創立以来名大とともにあり、その歴史を見守ってきたものとして、鏡ヶ池があります。キャンパスの北西端に位置する、面積約11,500㎡の大池です。

この鏡ヶ池は、もともとは農業灌漑用の溜め池でした。その後、大正末期から、この一帯の土地区画整理事業が始まりましたが、あえて埋め立てず、自然の風趣を保存するために残されたのです。

東山キャンパスの敷地は、名帝大の創立とほぼ同時に、地域の土地区画整理組合から鏡ヶ池とともに無償で寄付されました。渋沢元治初代総長は、「緑の学園」をテーマとするキャンパス構想をかかげ、植樹に力を入れましたが、鏡ヶ池の水景もその重要な一環でした。大学の外周に堀を

設け、そこへ鏡ヶ池から滝を落とすとか、池の南側を風致地区にして、学生集会所を建てるなどの計画が立案されています。当時の鏡ヶ池は、現在の2倍くらいの面積があり、形も正方形に近い台形でした。現在の工学部1号館やベンチャービジネスラボラトリーなどの地区はかつて池だったのです。

ただ学部が東山への集結が始まり、平坦な敷地が少なくなると、風致ばかりを重視するわけにはいかなくなりました。1956（昭和31）年に、工学部拡張のため第1次の埋め立てがなされ、さらに1979年度にも埋め立てられて、現在のような細長い台形になったのです。

しかし、今でも鏡ヶ池は、貴重な水景であると同時に、さまざまな水生生物や野鳥も観察でき、春には桜の名所となるなど、名大の憩いの場であり続けています。



- | | | |
|---|---|--|
| 1 | 2 | 1 1947（昭和22）年当時の米軍撮影による航空写真（国土地理院所蔵）。現在の北部厚生会館や工学部7号館のすぐ近くまで池であった。 |
| 4 | 3 | 2 1970（昭和45）年当時。第1次の埋め立て後だが、まだ現在より幅が広い。 |
| | | 3 1985（昭和60年）当時。第2次埋め立てにより、現在の形になった。 |
| | | 4 現在の鏡ヶ池付近図 |